

2012 年度
関西福祉科学大学大学院
社会福祉学研究科
心理臨床学専攻

修士論文題目

母性愛信奉が子育てに及ぼす影響
大学生・子育て中・子育て終了の3世代調査から

指導教員（ 谷向 みつえ 准教授 ）

社会福祉学研究科心理臨床学専攻

学生番号 21161004

氏名 高内 百合子

目 次

第 I 部 序論	1
第 1 章 目的	8
第 2 章 方法	11
第 II 部 実証的研究	13
第 1 章 第 1 研究	13
第 1 節 目的	13
第 2 節 結果	13
第 3 節 考察	20
第 2 章 第 2 研究	22
第 1 節 目的	22
第 2 節 結果	22
第 3 節 考察	37
第 3 章 第 3 研究	39
第 1 節 目的	39
第 2 節 結果	39
第 3 節 考察	45
第 III 部 全体的考察	48
第 1 章 全体的考察	48
第 1 節 本論分の結論	48
第 2 節 今後の課題	49
第 IV 部 引用文献	50

第 I 部 序論

1989年の1.57ショックにより少子化問題が顕在化した1990年代以降、子育て支援が、少子化対策の中心をなす政策として重要視されるようになった。1997年の「人口問題審議会報告書」では、固定的な男女の役割分業や職場優先の企業風土を是正する必要があることを指摘し、これ以降実施される政策の方向性を転換する役割を果たした。

これまでの子育て支援政策では、仕事と子育ての両立を支援するという観点から、「エンゼルプラン」(1994年)「新エンゼルプラン」(1999年)が保育分野を中心に展開されていたが、2002年に厚生労働省により発表された「少子化対策プラスワン」では、従来の未婚化や晩婚化に加え、夫婦の出生力の低下という新たな少子化要因が生じていることを踏まえ、男性をふくめた働き方の見直しや、地域の子育て支援などの総合的な取り組みを、社会全体で推進していくことの必要性が示された。2006年発表の「新しい少子化対策について」では「子育ての喜びを実感できること」を目的のひとつとして、年齢進行別の子育て支援策が総合的に示された。また、2010年発表の「子ども・子育てビジョン」では、次代を担う子ども達が健やかにたくましく育ち、子どもの笑顔があふれる社会のために、子どもと子育てを全力で応援することを目的として、「子どもが主人公(チルドレン・ファースト)」という考えの下、これまでの「少子化対策」から「子ども・子育て支援」へと視点を移し、社会全体で子育てを支えると共に、「生活と仕事と子育ての調和」を目指すこととされた。そして、政府をあげて、子どもを産み育てることに夢を持てる社会の実現のための施策を強力に推進することとされており、2010年度から2014年度までの5年間を目途とした数値目標が掲げられている。

では子どもの数は増加しているのだろうか、厚生労働省が2012年に公表した2011年人口動態統計(確定数)によると、1人の女性が一生の間に産む子どもの数を示す「合計特殊出生率」は1.39で前年度と同数である。しかし、実際の出生数は、2010年が107.1万人であり、2011年が105.1万人である。これは、「女性人口」が減少し、「年齢構成の違い」が低下したことによるからである。今後も「女性人口」の減少傾向と「年齢構成の違い」の低下傾向は続くことから、「合計特殊出生率」が変わらなければ、出生数は今後も減少することになる。

国立社会保障・人口問題研究所が発表している「第14回出生動向基本調査(2010年)」では、夫婦が考える理想の子ども数と、実際に持つ子ども数を平均値で比較すると、2010年では、理想の子ども数は2.42人であるが、平均出生児数は1.96人である。両者の調査を始めた1977年以降、実際に持つ子ども数は、常に理想の子ども数を下回っている。その理由として「子育てや教育にお金がかかりすぎるから」が最も多い。また、30歳代では「これ以上、育児の心理的・肉体的負担に耐えられないから」という回答が他の年齢層に比べて多くなっている。

このような子育ての心理的・肉体的負担感を減らすために、様々な支援事業が展開されている。例えば、地域子育て支援拠点事業（ひろば型・センター型・児童館型）、養育支援訪問事業、ファミリー・サポート・センター事業、放課後児童健全育成事業、乳児家庭全戸訪問事業などである。しかし、このような支援事業が展開されているにもかかわらず、子育ての負担感は減ることはなく、子育ての放棄、体罰などの虐待事件のニュースが毎日のように報道されている。

2011年度に全国の児童相談所で対応した児童虐待相談件数は、59,862件であり、前年度よりも3,219件（105.7%）増加している。1990年の1,101件からその数は減ることなく増え続けている。また、心中以外の虐待死の主たる加害者は「実母が」30人（58.8%）と最も多く、次いで「実父」が7人（13.7%）、「実母の交際相手」が4人（7.8%）であった。心中による虐待死（未遂を含む）では、主たる加害者は、「実母」が33人（70.2%）と最も多く、次いで「実父」が11人（23.4%）、祖母2人（4.2%）であった。これらのことから、実母が主として子どもを虐待している実態が浮かんでくる。

日々の生活の中で、虐待事件にまでは至らなくても、子育てに苛立ったり、不安に思ったり、子育て自体が楽しくないとネガティブな気持ちになっている母親は多くいるのではないだろうか。大日向（1988）は、母性愛を一方向的に賛美してやまない従来の母性観が、虐待や事件を発生させる素地を作り、問題解決を探る目を曇らせているのではないかという問題提起をしている。また、母親の愛情を絶対視する考え方は、子どもは女性のもの、母親のものとして、男性も社会も育児から遠ざかって安穩とすることを許し、その一方で母親達に対しては「良き母であれ」とする規範を科して縛ってきたとしている。

また性別役割分業体制について若松・小口・柏木（1991）は、性別役割分業体制は働き蜂と言われる男性の働き方を続けるためには不可欠であり、子どもの健康な発達には母親が世話をして育てることが重要であるとの作られた常識あるいは固定観念が支えてきたとしている。

ではこのような母性観が確立したのにはどのような経過があったのであろうか。女性史研究から薮田（1999）は、男尊女卑の「女大学」、女工哀史、良妻賢母などといった形で、つねに女性は、それぞれの時代像に結びついた特定の通念・観念のもとにからめとられてきたとしている。小嶋（2001）は近代化過程で母親役割が強調され「世話し育児する母」としてだけではなく、「しつける母」・「教える母」としての役割が強調されていったとし、すぐれた母親となるための女子教育の必要性を日本の指導者は認め推進していったとしている。つまり良妻賢母思想は近代社会を支え維持するために必要な思想として奨励されたものであったのだ。

また、普遍的な概念としてとらえられる「母」について山村（1971）は、日本における母親は、単なる幼児体験の域を越えた存在として、子どもが「社会化」され、おとなとなり、さらに死ぬまで、終生影響を与え、日本人の行動を規定しているものとみなされているようであると、そのことは、特定の母子関係

を離れて、社会一般的に強調される傾向があるとしている。そして母子関係や母性愛の強さは、通分的にみられる共通性・普遍性であるというときには、多分に日本的な濃密な母子関係というものを基礎にして、無意識的にそのような類推的一般化を行っていることが多いとしている。

日本の文化において母は「宗教的」な機能を演じうるようなものとして観念されていると山村（1971）はいう。母性愛が神話として登場する基盤が出来上がっていたのだ。

そのような日本の伝統的な母性観に対する反駁を以下に述べる。まず、進化心理学の立場から、長谷川・長谷川（2000）はヒトの子育ては大きな負担のかかる仕事であり、母親が社会の中で孤立して単独でうまく行えるものではないと述べている。また、養育援助が見込めない子は、子自身の適応度(主として生存率)が低くなるとともに、親自身の将来の適応度(主として繁殖率)をも下げることになる。そのため、進化心理学では父親である男性に子の養育意志がない、母親自身とその親族にその子を養育する意志がない、社会全体がその子を認めない、という状況であれば、母親はもっと良いチャンスで妊娠した子に望みをたくし、現在の子を捨てる選択をすることもあると考えられると述べている。

次に、比較文化的考察から箕浦（2010）は、子育てはアロマザリング(母親以外による子育て)が基本であると述べている。また、アロマザリングの態様を決める2大要因は、当該社会の育児観、子ども観、ジェンダー観などの文化的意味体系と社会システムであるとし、歴史的に見れば、家事・育児に専念できる専業主婦というカテゴリーは、産業化が進み男性の賃金だけで家計が賄えるようになった社会システムの一時期の産物といえそうであるとしている。おなじく、ソーシャルネットワーク理論からも高橋（2010）は、「社会生活をして進化してきたヒトは乳児といえども複数の重要な他者を持つ」とし、乳児がアロマザリングによってこそ生き延びてきたとしている。

また、根ヶ山・柏木（2010）はヒトのアロマザリングについて、ヒトの場合は、家族のみならず、専門家・隣人など母親以外の多様な人たちが母子に関わっており、それらもアロマザリングのネットワークととらえることが可能である。これまでの育児においては、以上のようなアロマザリングのネットワークを有効に活用して、子育てが行われてきた。しかし、今日の育児では、そのようなアロマザリングは十分には活用されておらず、母子の孤立化の度を強めているとしている。

そして、子育ては「母親の育児本能に支えられて行われるもので、それがかなわないときにやむをえず他者が世話を代行する」という消極的発想で見られるべきではなく、子どもの育つ場を「複数の集団成員による重層的育児ネットワーク」と考えることが重要であるとしている。

さらに、アタッチメント理論から数井（2002）は、アタッチメントの構築には大まかに4つの考え方があると指摘している。それは、①一人の人物だけ(大

概が母親である)が重要な愛着対象者となる「単一モデル」(Monotropy)、②一人の人物(母親)が愛着の対象者であり中心であるが、他の保育者も安全の基地として、母親がいないときには機能しうると考える「階層的組織化モデル」(Hierarchy)、③愛着関係のネットワークを形成し、ある愛着が不安定であると、他の安定した愛着がそれを補償するように機能し、母子、父子、保育者と子という愛着ネットワークのうち、1つよりは2つ、2つよりは3つという関係で安定的であることが、子どもの情緒社会性の発達と肯定的に関連すると考える「統合的組織化モデル」(Integration)、④子どもは複数の人物を愛着対象者とするが、ただ、愛着関係は、その人物とある一定の時間を過ごした範囲で機能的であり、各保育者はそれぞれの範囲で特化し、その範囲でのみ安全の基地となりうる「独立的組織化モデル」(Independence)である。そして日本では社会経済的な背景もあって「単一モデル」的な概念化が圧倒的に受け入れられてきたのではないかとしている。また、Belsky(1973)に端を発した保育論争はアメリカのNational Institute of Child Health and Human Development(NICHHD)における長期縦断的な保育所養育の研究(e.g., NICHHD, 1997)で、大方の結論を見ており、保育所通所と、家庭養育で、アタッチメントについての差が検証されなかったとしている。

また発達心理学から見た母性・父性として、柏木(2001)は、「人口革命、産業構造の変化、労働力の女性化など激しい社会変動に直面して、性別分業を骨子とする近代家族の限界と問題が露呈され、性別分業家族の最適性は喪失した。このことは即、家族成員である男性・夫・父、女性・妻・母の心理発達も、従来の生別化限界に達し破綻しつつあることでもある」と述べている。そして今後は、父性・母性も、狭義の親役割の問題としてではなく、親性、養護性として重視されてゆくであろうとしている。

同じく育児不安について柏木(2010)は、その2つの規定因として、母親が無職であること、父親の育児不在をあげている。そして「母の手で」を信奉する結果、子・繁殖(子育て)に自己資源を全て投資し自分自身の成長発達の機会を自ら放棄してしまっている。その挙句の結果が育児不安であったとしている。そして、「母の手で」の信念が、自分の生き方をみずから拘束し、その結果、育児不安、社会からの孤立、夫との衡平性の欠如などに陥っている、自縄自縛の状況といえるとしている。また、他者への信頼の低さが伝統的ジェンダー観・性別役割分業観とは分かちがたく結びついて、アロマザリングの受容・普及を阻んでいるといえる述べている。

上記のように、様々な立場から子育ては女性の生得的な特性ではなく、「産む性」がそのまま「育てる性」として(大日向,2000)人々の中に意識付けられたものだと検証されている。

しかし、現実はどうであろうか、厚生労働省「平成22年社会保障を支える世代に関する意識等調査報告書」によれば、就学前の子どもと接する時間では、平日は男性が平均2時間1分であるのに対し、女性は正規就業者であっても平

均 6 時間 50 分となっており、男性と比べて子どもと接する時間が多い。休日についてみると、男性は平均 7 時間 46 分、女性は平均 12 時間 58 分となっており、休日についても女性のほうが長くなっている。

また、理想と思われる子育てと働き方については、就学前の子どもがいる者では、男女ともに「片働きで、一方が主に子育てを行う」が最も多く、男性は 46.2%、女性は 46.3%となっている。次いで、「共働きで、子どもを保育所に預ける」が、男性は 26.1%、女性は 27.3%となっている。

今後、子どもがほしいと答えた者の、子の年齢による希望する就業状態では、男性はどの場合でも「常勤」が最も多くなっている。女性は、子どもが生まれるまでの間と、子どもが中学校に入学して以降は「常勤」が最も多く、子どもが 1 歳になるまでの間は「育児休業(勤めに出ない)」が、子どもが 1 歳から小学校の間は「パート・アルバイト」が最も多くなっている。

内閣府大臣官房政府広報室「男女共同参画社会に関する世論調査」では「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考えについての調査を行っている。1992 年は、賛成が 60.1%、反対が 34%、であったが、2009 年には賛成 41.3%、反対 55.1%へと変わってきている。男女別にみると、男性は 45.9%が賛成で、51.1%が反対であった。女性では 37.3%が賛成で、58.6%が反対であった。年齢別にみると、賛成は 70 歳以上が最も多く 55.7%、次いで 30 代が 38.4%であった。20 代が最も少なく、30.7%であった。反対は、20 代が最も多く 67.1%、次いで 50 代が 59.7%であった。最も少なかったのは 70 歳以上で 41.4%であった。男女別で見ると、まだ男性の方が「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という意識が強いようであるが、年代別では、70 歳以上を除く全ての年代で「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」に反対の割合が高く、特に 20 代での反対の割合が大きい。これは女性、男性という性役割を見直すというよりも、社会の経済情勢(2007 年末頃からアメリカを中心とする金融不安、景気の減速、原油・原材料価格の高騰などから、我が国の景気も緩やかながら弱まりを示した。2008 年 9 月におけるアメリカのリーマン・ブラザーズ破綻では、金融不安が世界的な金融危機へと発展し、世界同時不況と呼ぶべき事態に至った。こうしたなかで、日本経済の状況も一変し、外需の大幅な減少に伴う企業部門の急速な悪化が始まった)が大きく反映しているのではないかと考えられる。つまり、今までのように夫のみの給料で生活をやりくりできない状況や、唯一の働き手である夫のリストラ問題も身近な問題として認識されるようになってきているのではないだろうか。

また、大日向(2005)は、子育てをしながら無理なく働けるよう、職場が仕事と家庭生活のバランスに配慮すること、同時に日中、子どもが過ごす保育所の環境を整備することが不可欠であると訴えている。しかし、これまではそうした対策を不十分に放置したまま、働く母親の罪悪感ばかりを強めて、心理的に追い詰めるような結果を招いているとしている。

そして、大日向(2005)は、「仕事か子育てかという二者択一的な生き方を、

性別によって強いている現状は、女性にとっては社会からの疎外を意味し、一方、男性にとっては育児や家庭生活からの疎外を意味する。いずれも人としてのトータルな生活を奪い、子育てを通して夫婦の礎を築くことを難しくしているといえよう」と述べている。

1976年に、大日向（1988）は、第2次大戦後のわが国の社会変動が、母親の意識・行動に及ぼした影響を分析するために、3つの時代に育児を担当した母親を対象として質問紙調査と、面接調査を行っている。3つの世代はそれぞれ、東京女子高等師範学校・現在のお茶の水女子大学を卒業した年次で分けられている。A世代は昭和3年から8年、B世代は昭和15年から20年、C世代は昭和40年から45年に卒業した人々である。それぞれの世代の特徴を大日向は、「昭和初期のA世代は、出生児数が多く、育児期間も長い。伝統的母性観を支持したうえで、育児を高く評価しており、育児期間中の心理も安定している。」とし、C世代の時代は、婦人解放運動など、世界的な規模で女性の生き方が再検討される時代背景の中「A世代とは対照的に育児に対する評価が概して低い。必ずしもまったく意義のない労働と評価しているわけではないが、育児以外に自分自身の生活や生きがいを求めたいという欲求の強い世代である。しかし、現実には育児協力者を得られない等の理由から育児に専念している母親が多く、意識と現実との不一致が心理的不安定感を導き出している。さらに、現代は価値観の多様化と共に、育児様式も多様化しており、このことが母親に主体的に育児様式を選択する余地を与える一方で、母親の心理的負担や、不安感を増徴する要因ともなっている」と述べている。B世代については、敗戦後の日々の生活そのものが逼迫していたということで、他の2世代とは異なるものが反映されているとしている。

大日向（1988）は3世代の調査を通して、母親としての意識や行動は社会情勢や時代状況と共に変容していることを明らかにしたと述べている。

若松・小口・柏木（1991）は、1985年に女性の生き方や考え方の形成を「職業との関連」という観点から理解するために、対象を大学卒以上の学歴を持つ高学歴女性に絞って、3年次大学生から卒後20年の東京女子大学の卒業生に対して横断調査を行っている（A世代 27歳 昭和34生まれ・B世代 32歳 昭和29生まれ・C世代 37歳 昭和24生まれ・D世代 42歳 昭和20生まれ・E世代 47歳 昭和14生まれ）。

この調査では「脱分業」「男性の家庭役割分担」「女性の職業進出」において妻と夫の比較がされている。そこでは、夫たちは「女性の職業進出」「男性の家庭役割分担」についてはかなり容認しているが、男女の基本的役割については、夫は仕事をして家計を支える。妻は家事・育児の責任を持つという性役割分業の意見を支持している結果を導き出している。

全体的な妻と夫との比較においても、妻群が現状の変革を求めているのに比べ、夫群は女性の新しい生き方に対する肯定と現状維持との間でディレンマに陥っていることがうかがわれるとしている。

「男性の家庭役割分担」「女性の職業進出」に比べ「脱分業」の得点が低いことから、若松ら（1991）は「妻たち自身も母親役割への執着が強い」としている。その理由として、育児と他の仕事を両立させる余力がないことや、子どもの問題行動などが起こったとき、安易に母親の養育態度にその原因を帰する風潮があるため育児に神経質になり、「脱分業」に躊躇する一因になっているとしている。また、世代間比較では、妻の「女性の職業進出」にのみ有意差が見られたが、「脱分業」「男性の家庭役割分担」では有意差はなかったとしている。世代を追って夫と妻の性役割をみると、生まれ育った時代より、その夫婦がライフステージのどの時期にあるのかの方が重要であると思われたとしている。

江上（2005）は「母性」・「母性愛」が養育にネガティブに作用する可能性およびそのメカニズムを探る体系的かつ精緻な心理学研究は未だほとんど行われていないとし、「母性愛」信奉傾向と子どもの発達水準との相互作用が育児場面における self-efficacy と育児不安を媒介して怒り制御不全へとつながるモデルと、相互作用効果が直接怒り制御不全にあらわれるモデルの両方を設定し検証を行っている。結果として「母性愛」をその状況や場面によって、またはそれと結びつく他の変数の如何によって、ポジティブにもネガティブにも形を変えるものであるという可能性を示唆したと結んでいる。

厚生労働白書等、様々な社会調査を見ると、性役割にとらわれる事も減ってきているようにも感じられるが、しかし、児童虐待などの加害者としては女性のほうが圧倒的に多いという事実がある。また子育ての悩みや、相談を訴えるのも圧倒的に女性が多いのも事実である。このことは何を意味しているのだろうか。子育ては生得的なものではないとされるものの果たしてどれぐらいの人々がそのような意識に立って子育て(家庭生活)に従事しているのだろうか。大日向（1988）の3世代研究で、母親としての意識や行動は、社会情勢や時代状況と共に変容していることを明らかにしたと述べているが、35年が経った今「母性」「母性愛」について人々の意識はどのような変化を見せているのだろうか。いまだに「良妻賢母」という考え方に知らず知らずの内に取り込まれてしまっている人はいないのだろうか。

また村井（2002）は、幸福感と育児態度の関係を調べ「外向的傾向の育児態度の母親は、幸福感が高く、神経質傾向や拒否的育児態度であると、幸福感は低い」としている。さらに、育児態度と育児負担感との関係では「母親が外向的傾向の育児態度であると、負担感が少なく、神経質傾向や、拒否的育児態度は負担感が大きい」としている。

また、育児支援のあり方として西出・江守（2011）は母親が楽しく健康的に育児期を過ごすには、母親の自己効力感を高めることと、夫および周囲の人の情緒的サポートが得られることであるとし、経済的な支援策も必要不可欠であるとしている。同じく、荒牧・田村（2003）は、育児不安と関連のあるサポートとして、夫からの育児サポート、夫親・近所の人、園の先生からのサポートであるとしている。また、ソーシャル・サポートは、育児に対するポジティブ

な心理的側面との関係が高いことが示唆されたとしている。田中（1998）も、赤ちゃんが関係性のなかで育つのなら、同じように母親もまた、関係性のなかで支えられなければ、安心して子育てにたずさわることなどできないと述べている。

高橋・園田（2008）は東京・沖縄での調査結果から、地域による育児サポートの違いを考察しているが、「サポートしてくれる近所の人がない」と回答した人が両地域において半数近くおり、近所の人とのつながりの希薄さが浮き彫りになった結果ではないかとしている。

第1章 目的

本研究では、3つの研究目的を設定する。第1研究では、社会文化的通念として存在するとされている伝統的性役割である「母性」が今も残っているのかを「子育て中」群（幼稚園、保育園に通っている子どもがいる）と「子育て終了」群（18歳未満の子どもがいない）、「大学生」群の3世代による比較研究を行うことにより明らかにする。

この研究には「母性愛」信奉傾向尺度（江上,2007,2005）を用いるが「母性愛」信奉傾向は、「子育て中」群、「子育て終了」群、「大学生」群（女）ともに大きな違いはないのではないかと考える。なぜならば、子育てに携わる時間の調査や、子育て中の就業形態の希望調査等の社会調査の結果から、女性が子育ての中心として認知されている状況が読み取れるからである。また「夫婦で子育て」「イクメン」「育児をしない男を父とは呼ばない」等のキャッチコピーで性役割をこえた子育てをアピールされてはいたが、現在発行されている雑誌等の目次には、父親参加の育児よりも、女性の積極的な育児が強調されているのが目につくからである。（例、「ママになってこんなに変わった！白書。ファッション・子育て・ダイエット等 saita 2013年 Vol セブン&アイ出版」「ママたちのおしゃれ時短のすべて。ワーキングママの忙しい楽しい1ヶ月着まわしカレンダー mamagirl 2012年 Vol.1 M-ON Entertainment」「暮らし心地よくするために今したいこと・お母さんは家族の太陽です。今の自分に自信を持って素敵ママライフ Neem 2012年 Vol.5 徳間書店」）。

仮説では、「大学生」群（男）の「母性愛」信奉傾向度合いが、一番高いのではないかと考えられるが、これも文献検討で考察した社会調査（厚生労働省「平成22年社会保障を支える世代に関する意識等調査報告書」・内閣府大臣官房政府広報室「男女共同参画社会に関する世論調査」）等の結果から、まだ男は仕事でという姿が見えるからである。仕事をするためには、女性が主に子育てを担当するという形態のほうを望むのではないかと考えるからである。また、調査協力者の大学生の父母の時代は前述の若松ら（1991）のA世代にほぼ相当し、母が子育ての主な担当者であったのではないかと考えるからである。そして、その姿を理想とするのではないだろうか。男子大学生はまだ子育てに従事していないので、男性の考え方の代表として扱うのは無理があるかもしれないが、「母性愛」信奉を脈々と日本に根付かせ続ける要因の一つとして指摘することができかもしれない。また、男性が描く「母性」についても、その理想とする姿や、女性はこのようにあらねばならないという思い込みなども表れるかもしれない。

「大学生」群の（男女）については、「母性愛」信奉傾向尺度のみを実施する。

第2研究では、「母性愛」信奉傾向の強さによって、育児態度（村井・村井・足立・仁平,1987）や育児ストレス（飯島,2004；長谷川,2007）に違いが見られるか、また「育児ストレス」を規定する要因は何かを探る。

「母性愛」信奉傾向と育児ストレスの関係は、「母性愛」信奉傾向が高ければ高いほど育児ストレスの度合いが増すのではないかと考えるが、反面「母性愛」信奉の度合いが高いからこそ育児に対しても積極的に取り組み喜びとしているということもあるのではないかと考える。江上（2005）の研究のように「母性愛」はポジティブにも、ネガティブにも働くものとも推測できる。では、どのような母親の育児態度が加わった時に育児ストレスは変化を見せるのであろうか。「母性愛」信奉傾向と、「神経質傾向」「拒否的態度」「外向的傾向」「統制的態度」の4つの因子との交互作用を見ることにより検証を行う。村井（2002）は「外向的傾向」は幸福感が高く、育児負担感が少ないとしているが、「母性愛」の強さには左右されないものなのであろうか。また、「神経質傾向」や「拒否的態度」であると、幸福感は低く、育児負担は大きいとしているが、これらも「母性愛」の強さには影響されないものなのであろうか。

第3研究では、「子育て中」群と「子育て終了」群の育児ストレスの違いと育児ストレス対処方法を横断的に調査比較する。これまでの研究では世代による子育て中の育児ストレスの違いの検討はされてこなかったが、今回は「子育て終了」群に対する回顧的研究を行う。育児ストレスは、子育て真最中の「子育て中」群が高く、「子育て終了」群については、全体的にそのストレス度は低くなるのではないかと考える。それは、「子育て終了」群については、過去を振り返っての回答となるため、ストレスの項目の多くの部分について印象が薄れているのではないかと考えるからである。しかし、「子育て終了」群で高い点数が見られる場合は、育児中に強固なストレスがかかっていたことがうかがえるし、その子育て時代の社会背景を伴った特徴として考察できるかもしれない。

育児ストレス対処方法尺度（高内,2012）からは、子育て中群、子育て終了群の子育て状況が特徴化されるのではないかと考える。なぜならば、対処方法と、社会状況（環境）が密接な関係を持っているからである。それらの対処方法を分析していくなかで、今の母親の抱えている子育ての困難さを浮かび上げらせ、今もとめられている子育て支援とはどのようなものなのかを明確にしていく。

第 2 章 方法

1. 手続き

2012 年 2 月から 2012 年 10 月にかけて、大阪府下にある A 大学の付属幼稚園の園児の母親と祖母、大阪府下の私立の保育園の園児の母親、調査者の友人、友人の知人、大阪府下の A 大学（社会福祉学部）・B 大学（農学部）・C 大学（経済学部）の大学生男女を対象に調査を行った。

付属幼稚園、私立保育園には、母親と祖母用の調査用紙をそれぞれに B5 版の返信用封筒を添付し、園を通じて配布した。家庭で記入後、封をして幼稚園、保育園に設置した回収ボックスに投入できるようにし後日回収した。調査者の友人、友人の知人には、B5 版返信用封筒を添付し郵送にて回収した。大学生は講義時間中に配布し、その場で回収した。回収された調査用紙の中から、未記入項目のある用紙や、条件に合わない等の回答は除外した。

2. 調査協力者

有効回答者数は、子育て中群（幼稚園、保育園に通っている子どもがいる）252 名、平均年齢 36.5 歳、年齢範囲 22 歳～47 歳。子育て終了群（18 歳未満の子どもがいない）142 名、平均年齢 58.7 歳、年齢範囲 42 歳～84 歳である。大学生群は男 241 名、平均年齢 19.6 歳、年齢範囲 17 歳～25 歳、女 146 名、平均年齢 19.5、年齢範囲 18 歳～23 歳である。

3. 調査内容

「子育て支援アンケート」と題して以下のような内容の調査を行った。子育て中群、子育て終了群への調査は①「母性愛」信奉傾向尺度（江上,2007,2005）（13 項目）[信頼性係数 $\alpha = .895$]、②育児態度尺度（村井・村井・足立・仁平,1987）（40 項目）[$\alpha = .755$]、③育児ストレス尺度（飯島,2004；長谷川,2007）（24 項目）[$\alpha = .843$]、④育児ストレス対処方法尺度（高内,2012）（25 項目）[$\alpha = .751$]、⑤フェイスシートである。大学生群への調査は①「母性愛」信奉傾向尺度（13 項目）、⑥フェイスシートである。

①「母性愛」信奉傾向尺度（江上,2007,2005）は社会文化的通念として存在する伝統的性役割観を信じ、それに従って育児を実践する傾向の高さを調べる尺度である。

②育児態度尺度は（村井ら,1987）「神経質傾向」「拒否的態度」「外向的傾向」「統制的態度」の 4 つの因子からなり、母親の育児態度傾向を測る。

③育児ストレス尺度（飯島,2004；長谷川,2007）は、幼稚園児母親用育児ストレス尺度（飯島,2004）を使い、長谷川（2007）が因子分析の結果採用した 40 項目から、本研究ではそれぞれの因子の中で、因子負荷量の高い 24 項目を選び、育児ストレス尺度とした。

育児ストレス尺度は、「母親としての無能力感」「夫婦関係の不協和」「対人関

係」「発達上の気がかり」「身体的疲労」「母子関係における愛着の不安定感」「社会・文化による重圧」「出産直後の不安定な気分」の 8 つの因子からなり、ストレスの高さを調べる。

④育児ストレス対処方法尺度（高内,2012）は、ストレス対処スタイル（村井,2002）の 15 項目を参考に、荒牧・田村（2003）、高橋・園田（2008）、大日向（1999）、金岡（2011）、大日向・佐藤（1996）らの文献、子育て広場での子育て中の母親からの聞き取りから得た情報をもとに新たに作成した 10 項目を加えた 25 項目で構成されている。

育児ストレス対処方法尺度は、「情報収集や支援の活用による対処」「他者との交流による対処」「感情的対処」「一人で我慢して頑張る対処」「夫の援助による対処」の 5 つの因子からなり、ストレスの対処方法を調べる。

3.倫理的配慮

本研究の調査に先立ち調査協力先の園長先生に研究目的、方法、意義、守秘義務、研究の協力および協力拒否が可能であることを説明し、研究の協力への承諾を得た。調査用紙には、調査者からの依頼文とともに園からも調査協力および調査協力拒否が可能であることの説明文を添付した。大学生には実施前に口頭により研究目的、方法、意義、守秘義務、調査協力及び調査協力拒否が可能であることを伝えた。

大学生以外の調査協力者の用紙は、全て B5 版の封筒に入れて密封の後回収できるようにした。

尚、本研究は 2011 年度関西福祉科学大学研究倫理委員会の承認を得ている。

第Ⅱ部 実証的研究

第1章 第1研究

第1節 目的

社会文化的通念として存在するとされている伝統的性役割である「母性」を信じる傾向が世代によって変化しているのかを「大学生」群、「子育て中」群と「子育て終了」群の3世代比較により検討する。

第2節 結果

Table1-1は「大学生」群、「子育て中」群と「子育て終了」群の3世代に「母性愛信奉傾向」を従属変数に所属を独立変数とした分散分析及びTukey法による多重比較を行ったものである。(所属とは「大学生女」群・「大学生男」群・「子育て中」群・「子育て終了」群をさす)

Table 1-1 母性愛信奉傾向を従属変数に所属を独立変数とした分散分析

所属		<i>n</i>	最小値	最大値	平均値	<i>SD</i>	<i>F</i> 値
① 大学生	男	241	13	65	39.68	8.56	10.17***
② 大学生	女	146	15	58	39.93	7.54	(④>①②)
③ 子育て中	女	253	14	65	42.06	8.65	(③>①)
④ 子育て終了	女	143	13	65	44.10	8.75	

*** $p<.001$

母性愛信奉傾向の得点は、「子育て終了」群の平均値が最も高く、次いで「子育て中」群、「大学生の女」群となっている。「大学生の男」群の平均値が最も低くなっている。

分散分析の結果、群間の得点差は0.1%水準で有意であった($F(3,779)=10.17$, $p<.001$)。Tukey法による多重比較を行ったところ、「子育て終了」群と「大学生男・女」群「子育て中」群と「大学生男」群との間に有意な差が認められ、「母性愛信奉傾向」は「子育て終了」群が「大学生男・女」群よりも有意に高く、「子育て中」群は「大学生男」よりも有意に高かった。

Table1-2は「子育て中」群と「子育て終了」群にわけ、各項目ごとに平均値の差の検定を行ったものである。

Table1-2 子育て中群・子育て終了群別にみた「母性愛信奉傾向」の項目ごとの平均値

所属（子育て中253 子育て終了143）		平均値	S D	F値	t値
1. 母親になることが女性にとって存在の証とみなされる	子育て中	2.47	1.10	.22	-2.23*
	子育て終了	2.73	1.15		
2. 子どものためならどんなことでもするつもりでいるのが母親である	子育て中	3.63	1.03	7.97	-.51 n. s.
	子育て終了	3.68	.87		
3. 子育ては何を差し置いても母親が行うべきことである	子育て中	2.78	1.07	2.94	-3.15**
	子育て終了	3.13	.99		
4. わが子のためなら自分を犠牲に出来るのが母親である	子育て中	3.72	.92	.01	.09 n. s.
	子育て終了	3.71	.94		
5. 母親であれば育児に専念することが第一である	子育て中	2.85	1.05	.86	-2.82**
	子育て終了	3.15	1.00		
6. 育児は女性に向いている仕事であるから、するのが自然である	子育て中	2.93	1.03	2.12	-2.47*
	子育て終了	3.18	.88		
7. 子どものためなら大抵のことは我慢できるのが母親である	子育て中	3.58	1.00	3.89	-1.16 n. s.
	子育て終了	3.69	.87		
8. 母親の愛情ほどに偉大で気高く無条件なものはない	子育て中	3.60	1.02	.34	-.79 n. s.
	子育て終了	3.69	1.02		
9. 子どもを産んで育てるのは社会に対する女性のつとめである	子育て中	2.49	1.08	5.19	-4.69***
	子育て終了	3.01	1.02		
10. なんといっても子どもには産みの母親が一番よいのである	子育て中	3.40	1.11	1.00	.71 n. s.
	子育て終了	3.32	1.05		
11. 育児に専念したいというのが女性の本音である	子育て中	2.70	1.00	2.19	-5.00***
	子育て終了者	3.21	.93		
12. 子どもが小さいうちは母親は家庭にいて子どものそばにいてやるべきである	子育て中	3.79	.99	.39	1.48 n. s.
	子育て終了	3.64	1.00		
13. 子どもを自分よりも大切に思う気持ちや行動こそが絶対必要である	子育て中	4.12	.78	.01	1.77 n. s.
	子育て終了	3.97	.87		

*** $p<.001$,** $p<.01$,* $p<.05$

検定の結果「1.母親になることが女性にとって存在の証とみなされる」($t(394)=-2.23, p<.05$)では「子育て中」群よりも「子育て終了」群のほうが有意に高い得点を示していた。

「3.子どもを産む母親だからこそ、子育ては何をさしおいても母親が行うべきことである」($t(394)=-3.15, p<.01$)では「子育て中」群よりも「子育て終了」群のほうが有意に高い得点を示していた。

「5.母親であれば育児に専念することが第一である」($t(394)=-2.82, p<.01$)では「子育て中」群よりも「子育て終了」群のほうが有意に高い得点を示していた。

「6.育児は女性に向いている仕事であるから、するのが自然である」($t(394)=-2.47, p<.05$)では「子育て中」群よりも「子育て終了」群のほうが有意に高い得点を示していた。

「9.子どもを産んで育てるのは社会に対する女性のつとめである」($t(394)=-4.69, p<.001$)では「子育て中」群よりも「子育て終了」群のほうが有意に高い得点を示していた。

「11.育児に専念したいというのが女性の本音である」($t(394)=-5.00, p<.001$)では「子育て中」群よりも「子育て終了」群のほうが有意に高い得点を示していた。

次項 Table1-3 は大学生を「男」群と「女」群にわけ、各項目ごとに平均値の差の検定を行ったものである。検定の結果「4.わが子のためなら、自分を犠牲にすることができるのが母親である」($t(385)=2.76, p<.01$)において「男」群よりも「女」群のほうが有意に高い得点を示した。

「11.育児に専念したいというのが、女性の本音である」($t(385)=-2.43, p<.05$)において「女」群よりも「男」群のほうが有意に高い得点を示した。

Table1-3 大学生男女別にみた「母性愛信奉傾向」の項目ごとの平均値

性別(男 241 女 146)		平均値	SD	F値	t値
1. 母親になることが、女性にとって存在の証とみなされる	男	2.49	1.14	1.48	-1.05 n. s.
	女	2.36	1.06		
2. 子どものためなら、どんなことでもするつもりでいるのが母親である	男	3.19	1.09	2.61	1.40 n. s.
	女	3.34	.94		
3. 子どもを産む母親だからこそ、子育ては何をさしおいても母親が行うべきである	男	2.30	1.11	7.22	-1.19 n. s.
	女	2.18	.93		
4. わが子のためなら、自分を犠牲にすることができるのが母親である	男	3.17	1.10	1.49	2.76 **
	女	3.48	.98		
5. 母親であれば、育児に専念することが第一である	男	2.71	1.04	.30	.03 n. s.
	女	2.71	1.05		
6. 育児は女性に向いている仕事であるから、するのが自然である	男	2.53	1.06	.01	.19 n. s.
	女	2.55	1.04		
7. 子どものためなら、たいていのことは我慢できるのが母親である	男	3.20	1.06	.54	1.24 n. s.
	女	3.33	.98		
8. 母親の愛情ほどに偉大で、気高く無条件なものはない	男	3.60	1.14	1.95	.19 n. s.
	女	3.62	1.04		
9. 子どもを産んで育てるのは、社会に対する女性のつとめである	男	2.62	1.08	.48	-.20 n. s.
	女	2.60	1.01		
10. なんといっても子どもには産みの母親が一番よいのである	男	3.51	1.22	3.63	-.37 n. s.
	女	3.47	1.07		
11. 育児に専念したいというのが、女性の本音である	男	2.78	.89	2.95	-2.43 *
	女	2.54	.94		
12. 子どもが小さいうちは、母親は家庭にいて子どものそばにいてやるべきである	男	3.72	.99	.66	.21 n. s.
	女	3.74	1.00		
13. 子どもを自分よりも大切に思う気持ちや行動こそが、絶対必要である	男	3.87	1.03	11.49	1.54 n. s.
	女	4.01	.83		

** $p < .01$, * $p < .05$

Table1-4 は「大学生男」群、「大学生女」群、「子育て中」群、「子育て終了」群にわけ、各項目ごとに平均値の差の検定を行ったものである。

検定の結果「1. 母親になることが、女性にとって存在の証しとみなされる」($F(3,779)=2.80, p < .05$)。Tukey 法による多重比較を行ったところ、「子育て終了」群と「大学生女」群との間に有意な差が認められ、「子育て終了」群が「大学生女」群よりも有意に高かった。

「2. 子どものためなら、どんなことでもするつもりでいるのが母親である」($F(3,779)=11.00, p < .001$)。Tukey 法による多重比較を行ったところ、「子育て終了」群「子育て中」群と、「大学生女」群「大学生男」群との間に有意な差が認められ、「子育て終了」群「子育て中」群が「大学生男」群「大学生女」群よりも有意に高かった。

「3. 子どもを産む母親だからこそ、子育ては何をさしおいても母親が行うべきである」($F(3,779)=29.21, p < .001$)。Tukey 法による多重比較を行ったところ、「子育て終了」群と「子育て中」群「大学生男」群「大学生女」群との間に有意な差が認められ、「母性愛信奉傾向」は「子育て終了」群は「子育て中群」、「大学生男」群「大学生女」群よりも有意に高かった。「子育て中」群は、「大学生男」群「大学生女」群よりも有意に高かった。

「4. わが子のためなら、自分を犠牲にすることができるのが母親である」($F(3,779)=14.72, p < .001$)。Tukey 法による多重比較を行ったところ、「子育て終了」群「子育て中」群「大学生女」群と「大学生男」群との間に有意な差が認められ、「子育て中」群「子育て終了」群「大学生女」群が「大学生男」群よりも有意に高かった。

「5. 母親であれば、育児に専念することが第一である」($F(3,779)=6.37, p < .001$)。Tukey 法による多重比較を行ったところ、「子育て終了」群と「子育て中」群「大学生男」群「大学生女」群との間に有意な差が認められ、「母性愛信奉傾向」は「子育て終了」群が「子育て中」群「大学生女」群「子育て男」群よりも有意に高かった。

「6. 育児は女性に向いている仕事であるから、するのが自然である」($F(3,779)=16.78, p < .001$)。Tukey 法による多重比較を行ったところ、「子育て終了」群「子育て中」群と「大学生男」群「大学生女」群との間に有意な差が認められ、「母性愛信奉傾向」は「子育て終了」群「子育て中」群が「大学生女」群「大学生男」群よりも有意に高かった。

「7. 子どものためなら、たいていのことは我慢できるのが母親である」($F(3,779)=10.30, p < .001$)。Tukey 法による多重比較を行ったところ、「子育て終了」群は「大学生男」群「大学生女」群と「子育て中」群は「大学生女」群との間に有意な差が認められ、「母性愛信奉傾向」は「子育て終了」群が「大学生男」群「大学生女」群よりも有意に高く、「子育て中」群は「大学生女」群よりも有意に高かった。

「9. 子どもを産んで育てるのは、社会に対する女性のつとめである」

($F(3,779)=7.58, p < .001$)。Tukey 法による多重比較を行ったところ、「子育て終了」群と「子育て中」群「大学生男」群「大学生女」群との間に有意な差が認められ、「母性愛信奉傾向」は「子育て終了」群が「大学生男」群「大学生女」群「子育て中」群よりも有意に高かった。

「11. 育児に専念したいというのが、女性の本音である ($F(3,779)=13.58, p < .001$)。Tukey 法による多重比較を行ったところ、「子育て終了」群と「子育て中」群「大学生男」群「大学生女」群との間に有意な差が認められ、「母性愛信奉傾向」は「子育て終了」群が「大学生男」群「大学生女」群「子育て中」群よりも有意に高かった。

「13. 子どもを自分よりも大切に思う気持ちや行動こそが、絶対必要である」($F(3,779)=3.45, p < .05$)。Tukey 法による多重比較を行ったところ、「子育て中」群と「大学生男」群との間に有意な差が認められ、「母性愛信奉傾向」は「子育て中」群が「大学生男」群よりも有意に高かった。

Table1-4 所属別にみた「母性愛信奉傾向」の項目ごとの平均値

子育て中 253・子育て終了 143						
大学生女 146	大学生男 241		平均値	SD	F 値	
1. 母親になることが、女性にとって存在の証しとみなされる	子育て中		2.47	1.10	2.80*	
	子育て終了		2.73	1.15		終了>大♀
	大学生女		2.36	1.06		
	大学生男		2.49	1.14		
2. 子どものためなら、どんなことでもするつもりでいるのが母親である	子育て中		3.63	1.03	11.00***	
	子育て終了		3.68	0.87		終了・中>大♀・♂
	大学生女		3.34	0.94		
	大学生男		3.19	1.09		
3. 子どもを産む母親だからこそ、子育ては何をさしおいても母親が行うべきである	子育て中		2.78	1.07	29.21***	
	子育て終了		3.13	0.99		終了>中>大♂
	大学生女		2.18	0.93		終了>中>大♀
	大学生男		2.30	1.10		
4. わが子のためなら、自分を犠牲にすることができるのが母親である	子育て中		3.72	0.92	14.72***	
	子育て終了		3.71	0.94		中・終了・大♀>大♂
	大学生女		3.48	0.98		
	大学生男		3.17	1.10		
5. 母親であれば、育児に専念することが第一である	子育て中		2.85	1.05	6.37***	
	子育て終了		3.15	1.00		終了>中・大♀・大♂
	大学生女		2.71	1.05		
	大学生男		2.71	1.04		

6. 育児は女性に向いている 仕事であるから、するのが 自然である	子育て中	2.93	1.03		16.78***
	子育て終了	3.18	0.88	終了・中>大♀・大♂	
	大学生女	2.55	1.04		
	大学生男	2.53	1.06		
7. 子どものためなら、たい ていのことは我慢できるの が母親である	子育て中	3.58	1.00		10.30***
	子育て終了	3.69	0.87	終了>大♀・大♂	
	大学生女	3.33	0.98	中>大♀	
	大学生男	3.20	1.06		
8. 母親の愛情ほどに偉大 で、気高く無条件なものは ない	子育て中	3.60	1.02		0.23n.s.
	子育て終了	3.69	1.02		
	大学生女	3.62	1.04		
	大学生男	3.60	1.14		
9. 子どもを産んで育てるの は、社会に対する女性のつ とめである	子育て中	2.49	1.08		7.58***
	子育て終了	3.01	1.02	終了>大♂・大♀・中	
	大学生女	2.60	1.01		
	大学生男	2.62	1.08		
10. なんといっても子ども には産みの母親が一番よい のである	子育て中	3.40	1.11		0.94n.s.
	子育て終了	3.32	1.05		
	大学生女	3.47	1.07		
	大学生男	3.51	1.21		
11. 育児に専念したいとい うのが、女性の本音である	子育て中	2.70	1.00		13.58***
	子育て終了	3.21	0.93	終了>大♂・大♀・中	
	大学生女	2.54	0.94		
	大学生男	2.78	0.89		
12. 子どもが小さいうちは、 母親は家庭にいて子どもの そばにいてやるべきである	子育て中	3.79	0.99		0.75n.s.
	子育て終了	3.64	1.00		
	大学生女	3.74	1.00		
	大学生男	3.72	0.99		
13. 子どもを自分よりも大 切に思う気持ちや行動こそ が、絶対必要である	子育て中	4.12	0.78		3.45*
	子育て終了	3.97	0.87	中>大♂	
	大学生女	4.01	0.83		
	大学生男	3.87	1.03		

*** $p<.001$, * $p<.05$

第3節 考察

今回の横断的検討からは、「母性愛信奉傾向」尺度における多重比較の結果「子育て中」群と「子育て終了」群では有意差が認められなかった。このことから、子育て経験者においては「母性愛」を信じる傾向には世代的な変化がないといえる。しかし、「子育て終了」群と「大学生男・女」群、「子育て中」群と「大学生男」群との間には有意差が認められることから「母性愛」を信じる傾向にも変化が見られるということが示された。

この変化は、それぞれの群の「母性愛信奉傾向」得点においても、「大学生男」群が一番平均得点が低く、「大学生女」群が次いで低くなっていることから、「母性愛」を信じる傾向は世代が下がるにつれ希薄化してきているということがうかがえる。

多重比較では有意差が出なかったが、項目ごとに検討すると、「子育て中」群と「子育て終了」群において「母性愛信奉傾向」の13の質問項目のうち6項目において有意な差が認められている。有意な差が認められている質問項目は全て「子育て終了」群のほうが高得点であった。

有意な差が認められている6項目のうち4項目は「母親になることが女性にとって存在の証とみなされる」「育児は女性に向いている仕事であるから、するのが自然である」「子どもを産んで育てるのは社会に対する女性のつとめである」「育児に専念したいというのが女性の本音である」など質問項目に「女性にとって」や「女性の」という言葉が入っており、「母親が」というよりも、「子育て終了」世代が過ごしてきた社会における「女性」としての在り方が表れているのではないだろうか。これは文献検討における藪田(1999)や根ヶ山(2001)山村(1971)からの論点とも一致する。

また、有意な差が認められている残りの2項目については「子どもを産む母親だからこそ、子育ては何をさしおいても母親が行うべきことである」「母親であれば育児に専念することが第一である」である。この2項目には「子育て終了」群と「子育て中」群の子育て環境や、社会情勢の違いが表れているのではないかと考えられる。

つまり、文献検討で見えてきたように、核家族化、近隣との付き合いの希薄化などにより、「子育て中」の母親たちは、アロマザリングの考え方にみられるように多くの人たちが関わる子育ての必要性(箕浦, 2010; 高橋, 2010)を実感しているからの結果なのではないだろうか。

また、保育所養育に対する考え方も変化してきている(数井, 2002)面もあり、また現代の厳しい経済事情による生活のためには保育所等の施設を利用し、働く必要があるというのも一般的な認識になってきているからなのではないだろうか。

大学生の男女の「母性愛信奉傾向」の質問項目ごとの差では、有意な差が認められたのは2項目だけであり、11項目においては有意な差が認められなかった。「大学生女」群は「大学生男」群よりも、わが子のためなら自分を犠牲に

できると考えているが、「大学生女」群は、「大学生男」群が思うほど育児に専念したいとは思っていないということが分かる。

次に Table1-4 の 4 群の「母性愛信奉傾向」の質問項目ごとの多重比較から考察を行う。「母性愛信奉傾向」13 項目の内、有意な差が認められる項目は 10 項目であった。これらの項目は「子育て中」群または「子育て終了」群の両方が、またはどちらか片方の値が「大学生女」群、「大学生男」群よりも有意に高くなっている。つまり、「大学生」の世代における「母性愛信奉」の希薄化が質問項目ごとの多重比較からも読み取れるわけである。

では、世代による有意差の認められない 3 項目にはどのような項目が含まれているのであろうか。それは「母親の愛情ほどに偉大で、気高く無条件なものはない」「なんといっても子どもには産みの母親が一番よいのである」「子どもが小さいうちは、母親は家庭にいて子どものそばにいてやるべきである」である。これら 3 項目は、言い換えると、考え方については「子育て終了」世代から「大学生」の世代まで、世代を超えても同じであり、今なお受け継がれている「母性愛」の内容であるということである。

「母親の愛情ほどに偉大で、気高く無条件なものはない」「なんといっても子どもには産みの母親が一番よいのである」「子どもが小さいうちは、母親は家庭にいて子どものそばにいてやるべきである」は大日向（2000）の言う「三歳児神話」「母性愛神話」の項目であり、山村（1971）の言う、単なる幼児体験を超えた存在として終生影響を与え、「宗教的」な機能までも演じる母の部分でもある。

要約すれば、「母性」を信じる傾向は「子育て中」「子育て終了」という、「子育て経験者」の世代では同じように信じられてきたことが示されたが、「子育て未経験者」の「大学生」の世代では、希薄化してきているということがうかがえた。

また、「子育て中」群「子育て終了」群の項目ごとの比較からは、社会における「母親」としてだけではなく「女性」としても、藪田(1999)、根ヶ山（2001）、山村（1971）らの言う良妻賢母思想や、男尊女卑思想などがまだまだ強く残っている時代背景もうかがうことができた。

同じく「大学生女」群「大学生男」群の項目ごとの比較では、文献検討でもみたように「妻は子育てに専念」という男の思い込みがそこにはあらわれているのかもしれない。女性は「育児に専念したいというのが女性の本音」などとは、男性ほど思っていないということを男性は知るべきであろう。「母性愛」を信じる傾向は希薄化してきてはいるものの、まだ男性と女性の考え方の中には性役割に対するくい違いが見られるようである。

所属別 4 群の比較では、より鮮明に世代を超えて受け継がれていく内容が明らかになった。「3 歳児神話」「母性愛神話」の根強さをそこには見ることができた。

第2章 第2研究

第1節 目的

第2研究では「母性愛信奉傾向」の強さによって、「育児態度」や「育児ストレス」に違いは見られるのか、また「育児ストレス」を規定する要因は何かを探る。

第2節 結果

「母性愛信奉傾向」と「育児ストレス」、「育児態度」との関係を調べた。

Table2-1は、「育児ストレス」を従属変数「母性愛信奉傾向」の合計得点を、三等分で低・中・高群に分け独立変数とした分散分析である。その結果「子育て中」群、「子育て終了」群共に、三群間に育児ストレス得点の有意な差は認められなかった。

Table2-1 「育児ストレス」を従属変数「母性愛信奉傾向」（低中高群）を独立変数とした分散分析

所属	母性愛信奉傾向	<i>N</i>	平均値	<i>SD</i>	<i>F</i> 値
子育て中	低	84	58.98	14.63	1.51 n. s.
	中	84	60.65	10.25	
	高	83	62.22	10.85	
	合計	251	60.61	12.10	
子育て終了	低	48	57.31	12.79	.80 n. s.
	中	48	58.50	12.18	
	高	46	56.85	11.74	
	合計	142	57.56	12.18	

次項 Table2-2 は、「母性愛信奉傾向」と「育児ストレス」の因子の相関である。「子育て中」群の「発達上の気がかり」との間に $r=.148$ ($p<.05$) 「身体的疲労」との間には $r=.196$ ($p<.01$) 「社会・文化による重圧」との間には $r=.212$ ($p<.01$) 「育児ストレス全体」とは $r=.118$ ($\dagger p<.1$) の正の相関が認められた。「母子関係における愛着の不安定感」との間には $r=-.289$ ($p<.01$) の負の相関が認められた。「子育て終了」群では「母子関係における愛着の不安定感」との間に $r=-.294$ ($p<.01$) の負の相関が認められた。

Table2-2 「母性愛信奉傾向」と「育児ストレス」の因子相関

母性愛信奉傾向		母親						母子関係		
		とし ての 無能 力感	夫婦 の不 協和	対人 関係	発達 上の 気が かり	身体 的疲 労	出産後の 不安定な 気分	社会文 化によ る重圧	における 愛着の不 安定感	育児 スト レス
奉 傾	子育て中 (n=253)	.081	.055	.042	.148*	.196**	.021	.212**	-.289**	.118†
向	子育て終了 (n=143)	.088	.058	-.038	-.106	.020	.012	.143	-.294**	-.011

** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .1$

次項 Table2-3 は「母性愛信奉傾向」の低・中・高群（合計得点を、三等分に分けた）によって「育児ストレス」の因子得点が異なるかどうかを検討するために、「子育て中」群と「子育て終了」群を個別に、1 要因の分散分析を行ったものである。

「子育て中」群の「身体的疲労」では群間の得点差は 5%水準で有意であった ($F(2,249)=4.05, p<.05$)。Tukey 法による多重比較を行ったところ、「母性愛信奉傾向」の高群と低群との間に有意な差が認められ、高群は低群よりも有意に高かった。

「社会・文化による重圧」では群間の得点差は 5%水準で有意であった ($F(2,249)=4.44, p<.05$)。Tukey 法による多重比較を行ったところ、「母性愛信奉傾向」の高群と低群との間に有意な差が認められ、高群は低群よりも有意に高かった。

「母子関係における愛着の不安定感」では群間の得点差は 0.1%水準で有意であった ($F(2,249)=8.41, p<.001$)。Tukey 法による多重比較を行ったところ、「母性愛信奉傾向」の低群と中・高群との間に有意な差が認められ、低群は、中・高群よりも有意に高かった。

「子育て終了」群の「母子関係における愛着の不安定感」では群間の得点差は 5%水準で有意であった ($F(2,139)=4.15, p<.05$)。Tukey 法による多重比較を行ったところ、「母性愛信奉傾向」の低群と高群においてに有意な差が認められ、低群は、高群よりも有意に高かった。

Table2-3 「育児ストレス」因子を従属変数「母性愛信奉傾向」（低中高群）を独立変数とした分散分析

子育て中		<i>N</i>	平均値	<i>SD</i>	<i>F</i> 値
母親としての無能力感	低	84	9.35	2.49	.80 n. s.
	中	85	9.39	2.05	
	高	83	9.72	1.75	
	合計	252	9.48	2.12	
夫婦関係の不協和	低	84	7.11	2.70	.09n. s.
	中	84	7.27	2.87	
	高	84	7.26	2.77	
	合計	252	7.21	2.77	
対人関係	低	84	7.15	2.27	.65n. s.
	中	85	7.55	2.26	
	高	83	7.43	2.45	
	合計	252	7.38	2.32	
発達上の気がかり	低	84	5.83	2.64	1.93n. s.
	中	85	6.42	2.43	
	高	84	6.54	2.38	
	合計	253	6.26	2.50	
身体的疲労	低	84	7.63	2.97	4.05* 高 > 低
	中	85	8.25	2.32	
	高	84	8.83	2.88	
	合計	253	8.24	2.77	
出産後の不安定な気分	低	84	5.06	2.80	.33n. s.
	中	85	5.24	2.68	
	高	84	5.4	2.83	
	合計	253	5.23	2.76	
社会・文化による重圧	低	84	9.74	3.53	4.438* 高 > 低
	中	85	10.41	2.73	
	高	84	11.15	2.94	
	合計	253	10.43	3.13	
母子関係における愛着の不安定感	低	84	7.11	2.54	8.41*** 低 > 中・高
	中	85	6.13	1.84	
	高	84	5.81	1.97	
	合計	253	6.35	2.20	

子育て終了		<i>N</i>	平均値	<i>SD</i>	<i>F</i> 値
母親としての無能力感	低	48	7.79	2.40	1.07n. s.
	中	48	8.46	2.08	
	高	46	8.04	2.29	
	合計	142	8.1	2.26	
夫婦関係の不協和	低	48	8.02	3.23	.60n. s.
	中	48	8.63	2.99	
	高	46	8.65	3.30	
	合計	142	8.43	3.17	
対人関係	低	48	7.75	2.47	.65n. s.
	中	48	7.52	1.92	
	高	46	7.24	2.11	
	合計	142	7.51	2.18	
発達上の気がかり	低	48	6.02	2.17	.809n. s.
	中	48	6.15	2.07	
	高	46	5.61	2.17	
	合計	142	5.93	2.13	
身体的疲労	低	48	7.52	2.66	.16n. s.
	中	48	7.77	2.45	
	高	46	7.76	2.33	
	合計	142	7.68	2.47	
出産後の不安定な気分	低	48	3.79	2.06	.22n. s.
	中	48	4.06	2.40	
	高	46	4.02	2.01	
	合計	142	3.96	2.15	
社会文化による重圧	低	48	9.21	2.80	.26n. s.
	中	48	9.5	2.51	
	高	46	9.54	2.07	
	合計	142	9.42	2.47	
母子関係における愛着の不安定感	低	48	7.21	2.31	4.15 * 低 > 高
	中	48	6.42	2.24	
	高	46	5.98	1.69	
	合計	142	6.54	2.15	

*** $p < .001$, * $p < .05$

Table2-4 は「子育て中」群と「子育て終了」群における「育児態度」の下位尺度の平均値の差の検定を行ったものである。

Table2-4 所属別にみた「育児態度」の因子の平均値

	子育て中群 (n = 252)		>	子育て終了群 (n = 141)		F 値	t 値
	平均値	S D		平均値	S D		
神経質傾向	17.78	4.63	>	16.40	4.84	.56	2.80 **
拒否的態度	22.18	4.09	>	19.10	4.79	2.97	6.73 ***
外向的傾向	23.69	3.22		23.43	3.55	.41	.74
統制的態度	22.57	3.13		22.39	3.38	1.01	.52

*** $p < .001$, ** $p < .01$

検定の結果「神経質傾向」($t(391)=2.80, p<.01$)と「拒否的態度」($t(391)=6.73, p<.001$)において「子育て終了」群よりも「子育て中」群のほうが有意に高い得点を示していた。

次項 Table2-5 は「母性愛信奉傾向」の低・中・高群（合計得点を三等分で分けた）によって「育児態度」の4つの因子得点が異なるかどうかを検討するために、1要因の分散分析を行ったものである。

分散分析の結果、子育て中の「拒否的態度」では群間の得点差は5%水準で有意であった ($F(2,249)=2.96, p<.05$)。Tukey 法による多重比較を行ったところ、「母性愛信奉傾向」の高群と低群との間に有意な差が認められ、低群は高群よりも有意に高かった。

「統制的態度」では群間の得点差は0.1%水準で有意であった ($F(2,249)=21.13, p<.001$)。Tukey 法による多重比較を行ったところ、「母性愛信奉傾向」の高群と中群、低群との間に有意な差が認められ、高群は中群よりも有意に高く、中群は低群よりも有意に高かった。

子育て終了の「統制的態度」では群間の得点差は5%水準で有意であった ($F(2,138)=3.57, p<.05$)。Tukey 法による多重比較を行ったところ、「母性愛信奉傾向」の高群と低群において有意な差が認められ、高群は低群よりも有意に高かった。

Table2-5 「育児態度」因子を従属変数「母性愛信奉傾向」（低中高群）を独立変数とした分散分析

		母性愛信奉傾向	N	平均値	SD	F 値
子 育 て 中	神経質傾向	低	83	17	4.971	2.554n. s.
		中	85	17.73	4.286	
		高	84	18.61	4.531	
		合計	252	17.78	4.63	
	拒否的態度	低	83	23.02	4.367	2.960*
		中	85	22.01	4.142	低 > 高
		高	84	21.52	3.649	
		合計	252	22.18	4.094	
	外向的傾向	低	83	23.23	3.514	2.720n. s.
		中	85	23.49	3.092	
		高	84	24.33	2.971	
		合計	252	23.69	3.221	
統制的態度	低	83	21.05	2.926	21.133 ***	
	中	85	22.67	3.053	高 > 中 > 低	
	高	84	23.96	2.722		
	合計	252	22.57	3.128		
子 育 て 終 了	神経質傾向	低	48	16.27	4.907	.072n. s.
		中	47	16.62	4.798	
		高	46	16.3	4.912	
		合計	141	16.4	4.84	
	拒否的態度	低	48	19.25	5.155	1.397n. s.
		中	47	19.83	4.655	
		高	46	18.2	4.48	
		合計	141	19.1	4.79	
	外向的傾向	低	48	22.79	3.724	1.171n. s.
		中	47	23.7	3.476	
		高	46	23.8	3.429	
		合計	141	23.43	3.552	
統制的態度	低	48	21.77	2.845	3.574 *	
	中	47	21.98	3.75	高 > 低	
	高	46	23.46	3.305		
	合計	141	22.39	3.378		

*** $p < .001$, * $p < .05$

次項 Table2-6 は「育児ストレス」の低・中・高群（合計得点を三等分で分けた）によって「育児態度」の因子得点が異なるかどうかを検討するために、1 要因の分散分析を行ったものである。

分散分析の結果、子育て中の「神経質傾向」では群間の得点差は 0.1%水準で有意であった ($F(2,249)=71.84, p<.001$)。Tukey 法による多重比較を行ったところ、「育児ストレス」の高群と中群と低群との間に有意な差が認められ、高群は中群、低群よりも有意に高かった。中群は低群よりも有意に高かった。

子育て中の「拒否的態度」では群間の得点差は 0.1%水準で有意であった ($F(2,249)=45.04, p<.001$)。Tukey 法による多重比較を行ったところ、「育児ストレス」の高群と中群と低群との間に有意な差が認められ、高群は中群、低群よりも有意に高かった。中群は低群よりも有意に高かった。

子育て中の「外向的傾向」では群間の得点差は 0.1%水準で有意であった ($F(2,249)=19.68, p<.001$)。Tukey 法による多重比較を行ったところ、「育児ストレス」の高群と中群・低群との間に有意な差が認められ、中群・低群は高群よりも有意に高かった。

子育て中の「統制的態度」では群間の得点差は 5%水準で有意であった ($F(2,249)=3.58, p<.05$)。Tukey 法による多重比較を行ったところ、「育児ストレス」の高群と低群との間に有意な差が認められ、高群は低群よりも有意に高かった。

子育て終了の「神経質傾向」では群間の得点差は 0.1%水準で有意であった ($F(2,138)=25.13, p<.001$)。Tukey 法による多重比較を行ったところ、「育児ストレス」の高群・中群と低群との間に有意な差が認められ、高群・中群は低群よりも有意に高かった。

子育て終了の「拒否的態度」では群間の得点差は 0.1%水準で有意であった ($F(2,138)=24.89, p<.001$)。Tukey 法による多重比較を行ったところ、「育児ストレス」の高群・中群と低群との間に有意な差が認められ、高群・中群は低群よりも有意に高かった。

子育て終了の「外向的傾向」では群間の得点差は 1%水準で有意であった ($F(2,138)=7.22, p<.01$)。Tukey 法による多重比較を行ったところ、「育児ストレス」の高群と中群・低群との間に有意な差が認められ、中群、低群は高群よりも有意に高かった。

Table2-6 「育児態度」4因子を従属変数「育児ストレス」(低中高群)を独立変数とした分散分析

育児ストレス		N	平均値	SD	F 値	
子育て中	神経質傾向	低	84	14.51	3.25	71.84***
		中	83	17.47	3.49	高>中>低
		高	85	21.32	4.28	
		合計	252	17.78	4.63	
	拒否的態度	低	84	19.35	3.51	45.04***
		中	83	22.81	3.11	高>中>低
		高	85	24.38	3.89	
		合計	252	22.18	4.09	
	外向的傾向	低	84	24.86	3.00	19.68***
		中	83	24.16	2.67	中・低>高
		高	85	22.07	3.31	
		合計	252	23.69	3.22	
	統制的態度	低	84	21.85	2.95	3.58*
		中	83	22.8	3.33	高>低
		高	85	23.06	3.01	
		合計	252	22.57	3.13	
子育て終了	神経質傾向	低	48	13.08	2.75	25.13***
		中	48	17.23	4.57	高・中>低
		高	45	19.04	4.93	
		合計	141	16.4	4.84	
	拒否的態度	低	48	15.83	3.94	24.87***
		中	48	19.92	3.67	高・中>低
		高	45	21.71	4.77	
		合計	141	19.1	4.79	
	外向的傾向	低	48	24.58	3.20	7.22**
		中	48	23.67	3.20	低・中>高
		高	45	21.93	3.81	
		合計	141	23.43	3.55	
	統制的態度	低	48	22.19	3.76	.20 n. s.
		中	48	22.63	3.31	
		高	45	22.36	3.08	
		合計	141	22.39	3.38	

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

次項 Table2-7 は「母性愛信奉傾向」と「育児態度」が「育児ストレス」の得点に及ぼす影響を検討するため「母性愛信奉傾向」と「育児態度」の 4 因子をそれぞれ合計得点を、三等分で低・中・高 3 群に分け、それぞれの群の「育児ストレス」の得点を求めたものである。

結果、「子育て中」群で一番「育児ストレス」の平均得点が高かった組み合わせは「母性愛信奉傾向」高く「拒否的態度」が高い組み合わせであった（平均値 72.39）。

最も平均得点が低かった組み合わせは「母性愛信奉傾向」が低く「拒否的態度」が低い組み合わせであった（平均値 47.33）。

「子育て終了」群で一番「育児ストレス」の平均得点が高かった組み合わせは「母性愛信奉傾向」が低く「神経質傾向」が高い組み合わせであった（平均値 69.54）。

最も平均得点が低かった組み合わせは「母性愛信奉傾向」が低く「神経質傾向」が低い組み合わせであった（平均値 48.17）。

Table2-7 所属別にみた「母性愛信奉傾向」「育児態度」の因子の低・中・高群の「育児ストレス」得点

母性愛信奉傾向	神経質傾向			外向的傾向			統制的態度			拒否的態度				
	低	中	高	低	中	高	低	中	高	低	中	高		
子育て中	低	平均値	50.93	60.82	71.77	67.06	57.04	50.32	60	58.3	56.92	47.33	59.3	67.3
		SD	9.93	13.41	13.6	16.59	9.86	10.02	16.56	11.97	13.39	8.01	10.26	14.8
		n	40	22	22	33	26	25	44	27	13	27	20	37
		平均値	52.5	60.61	68.86	62.07	61.43	58.33	59.77	59.28	62.83	53.29	62.11	66.41
	中	SD	8.66	6.951	7.811	11.91	7.8	10.54	10.37	9.97	10.41	7.39	10.57	8.02
		n	28	28	28	29	28	27	26	29	29	28	27	29
		平均値	58.31	57.58	68.56	66.7	63.2	58.61	61.08	60.89	63.45	57.68	60.7	72.39
	高	SD	12.04	8.482	9.28	9.66	9.8	11.49	9.412	11.78	10.71	10.42	8.99	8.67
		n	16	33	34	20	30	33	13	28	42	28	37	18
子育て終了	低	平均値	48.17	57.65	69.54	62.71	53.9	55.18	55.11	57.76	60.17	49.8	57.75	63.53
		SD	8.01	9.57	11.84	12.06	9.3	17.14	13.12	12.62	12.93	9.55	9.8	14.71
		n	18	17	13	17	20	11	19	17	12	15	16	17
		平均値	54.36	53	65.89	64.24	51.69	58	60.94	54	61.58	48.57	60	64.89
	中	SD	90.7	11.58	11.28	14.07	8.34	10.3	11.53	11.74	12.72	9.39	9091	11.38
		n	14	15	19	17	13	18	18	18	12	14	16	18
		平均値	51.81	55.88	63.71	63.71	55.43	52.61	57.4	60.85	54.35	52.84	56.13	64.82
	高	SD	10.37	10.49	11.94	12.12	11.31	9.76	13.31	9.54	11.98	8.61	12.13	12.84
		n	16	16	14	14	14	18	10	13	23	19	16	11

Figure2-1 から Figure2-8 は、所属別に「母性愛信奉傾向」「育児態度の各因子」「育児ストレスの」分散分析の結果をグラフに表したものである。

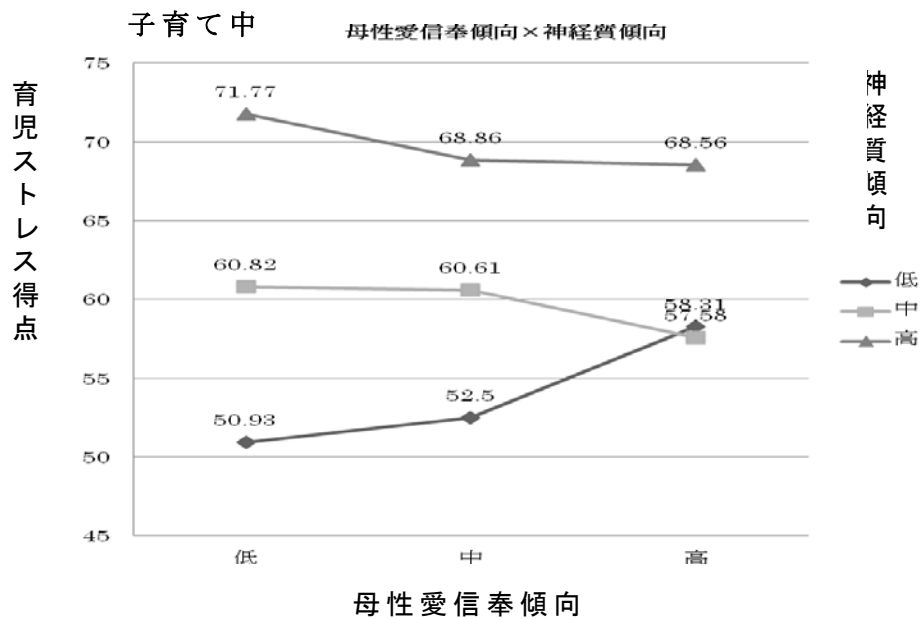


Figure2-1「育児ストレス」「母性愛信奉傾向」「神経質傾向」の分散分析

分散分析の結果、「母性愛信奉傾向」と「神経質傾向」において交互作用は有意 ($F(4, 242)=2.49, P<.05$) であった。「神経質傾向」が低い群において「母性愛信奉傾向」との単純主効果が有意 ($F(2, 242)=3.20, P<.05$ 高>低) であった。「母性愛信奉傾向」低・中・高群全てにおいて「神経質傾向」との単純主効果が有意であった。(低群 $F(2, 242)=31.87, P<.001$ 高>中>低)(中群 $F(2, 242)=19.0, P<.001$ 高>中>低) (高群 $F(2, 242)=11.81, P<.001$ 高>中・低)

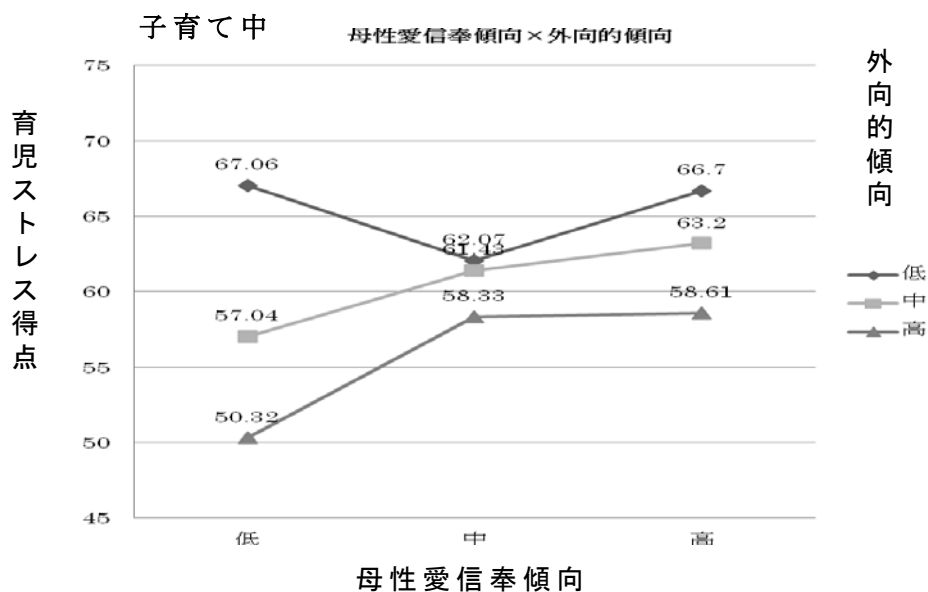


Figure2-2「育児ストレス」「母性愛信奉傾向」「外向的傾向」の分散分析

分散分析の結果「母性愛信奉傾向」と「外向的傾向」において交互作用は有意 ($F(4, 242)=2.64, P<.05$) であった。「外向的傾向」が高い群において「母性愛信奉傾向」との単純主効果が有意 ($F(2, 242)=4.61, P<.05$ 高・中>低) であった。「母性愛信奉傾向」低・高群において「外向的傾向」との単純主効果が有意であった。(低群 $F(2, 242)=16.15, P<.001$ 高・中<低) (高群 $F(2, 242)=3.37, P<.05$ 高<低)

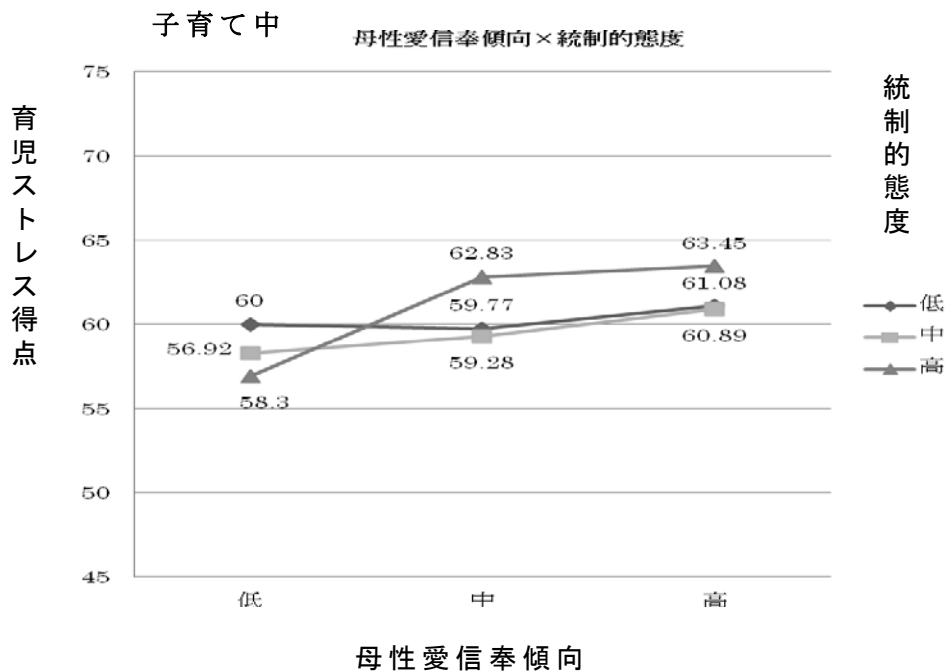
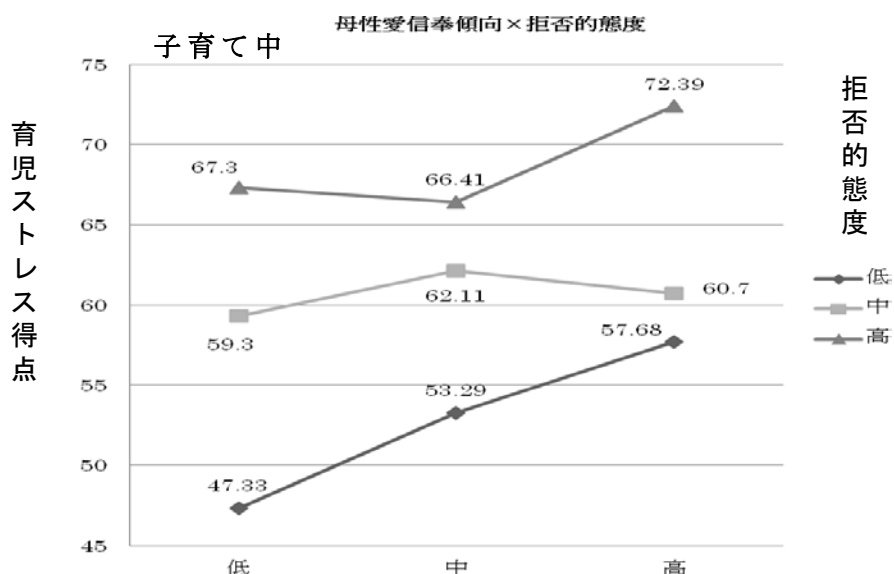


Figure2-3「育児ストレス」「母性愛信奉傾向」「統制的態度」の分散分析

分散分析の結果「母性愛信奉傾向」と「統制的態度」において交互作用は有意ではなかった ($F(4, 242)=.423n.s.$)。また主効果も有意ではなかった。



母性愛信奉傾向

Figure2-4「育児ストレス」「母性愛信奉傾向」「拒否的態度」の分散分析

分散分析の結果「母性愛信奉傾向」と「拒否的態度」において交互作用は有意ではなかった ($F(4, 242)=2.235$ n. s.)。「母性愛信奉傾向」(高・低)「拒否的態度」(高>中>低)共に主効果は有意であった。

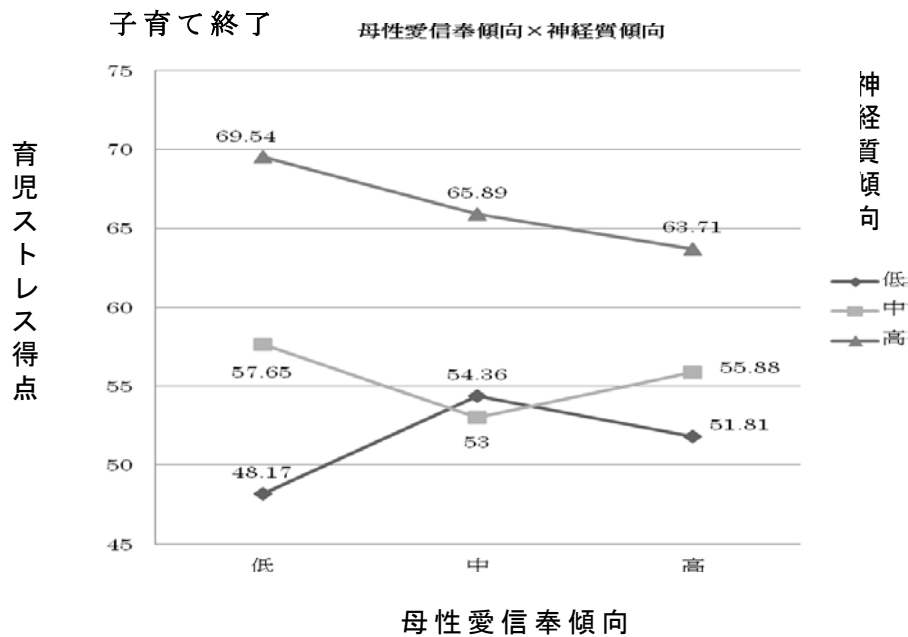


Figure2-5「育児ストレス」「母性愛信奉傾向」「神経質傾向」の分散分析

分散分析の結果「母性愛信奉傾向」と「神経質傾向」において交互作用は有意ではなかった。 ($F(4, 133)=1.59$ n. s.)「神経質傾向」の主効果は有意であった (高>中・低)。

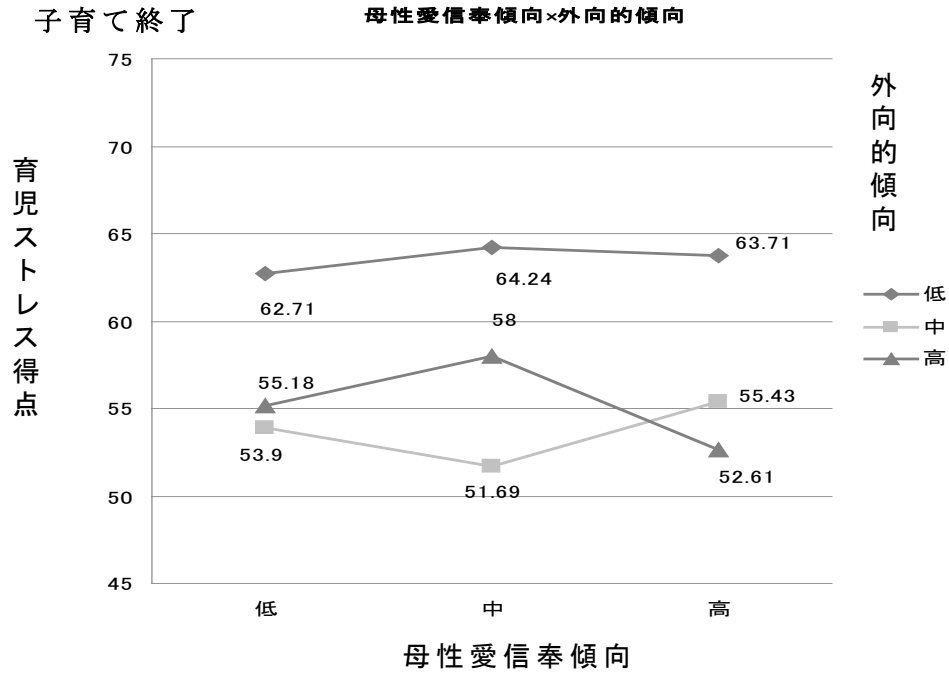


Figure2-6「育児ストレス」「母性愛信奉傾向」「外向的傾向」の分散分析

分散分析の結果「母性愛信奉傾向」と「外向傾向」において交互作用は有意ではなかった ($F(4, 133)=.629$ n. s.)。「外向的傾向」の主効果は有意であった (低 > 高・中)。

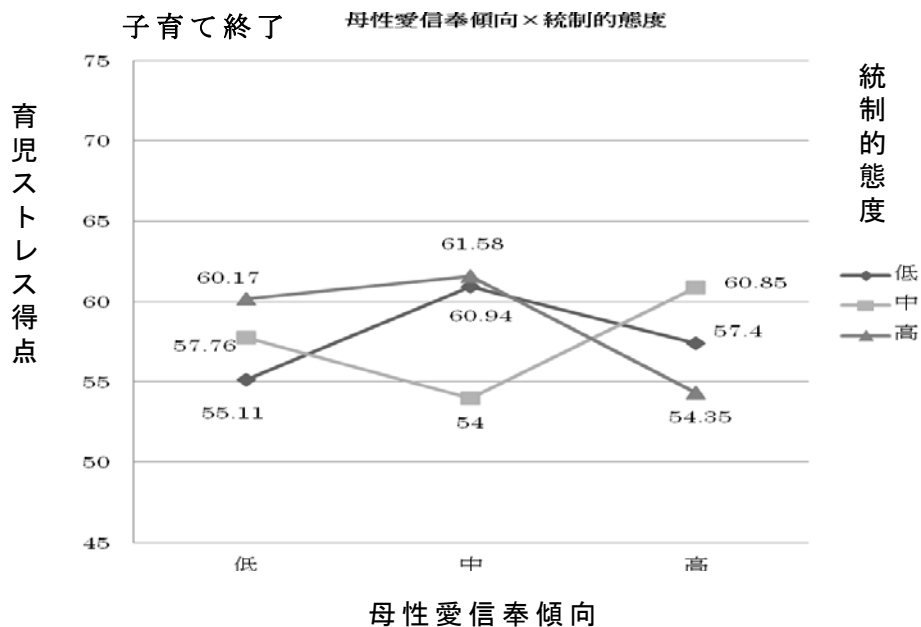


Figure2-7「育児ストレス」「母性愛信奉傾向」「統制的態度」の分散分析

分散分析の結果「母性愛信奉傾向」と「統制的態度」において交互作用は有意ではなかった ($F(4, 133)=1.89$ n. s.)。また主効果も有意ではなかった。

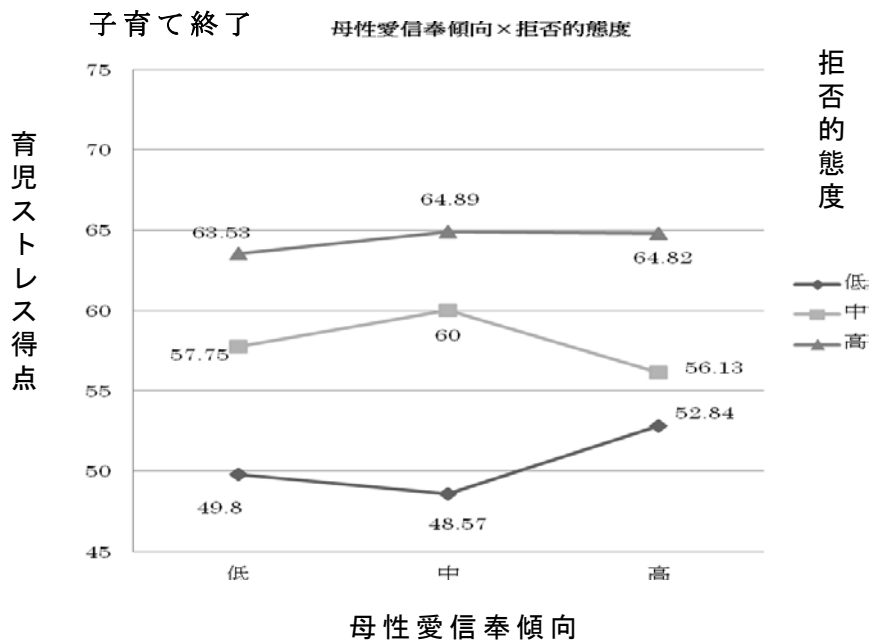


Figure2-8「育児ストレス」|母性愛信奉傾向|「拒否的態度」の分散分析

分散分析の結果「母性愛信奉傾向」と「拒否的態度」において交互作用は有意ではなかった。(F(4, 133)=.562 n. s.) 「拒否的態度」の主効果は有意であった(高>中>低)。

第3節 考察

Table2-1の結果に表れているように、「母性愛」の強さによって「育児ストレス」には有意な差は見られないことから、「母性愛信奉」は「育児ストレス」を規定するものではないということが本研究から認められた。しかし、育児ストレスが「母性愛信奉」と全く関係のないものかということそうではない。それは、Table2-3の「母性愛信奉傾向」と「育児ストレス」の因子の分散分析において有意な差が認められる項目があるということからも推察することができる。

「子育て中」群「子育て終了」群ともに有意な差の認められている「育児ストレス」の因子が「母子関係における愛着の不安定感」である。この因子は、「子育て中」群「子育て終了」群とも「母性愛信奉傾向」が高いほど「母子関係における不安定感」が低いという結果が出ている。言い換えれば、「母性愛信奉傾向」が高ければ「母子関係における安定感」が増すということであり、親子間のストレスを減少させる働きをしているということである。

「子育て中」群では「身体的疲労」「社会・文化による重圧」の2因子で有意な差が出ている。「身体的疲労」には「毎日くたくたに疲れる」「家事、育児に終わって睡眠不足の日々が続いている」「育児をしていると自分の体力の限界を感じる」の質問項目があり、「社会・文化の重圧」因子には「頑張っているのに育児は評価されない」「育児をしていると世間から取り残される」「周囲の人たちに、子どもの母親としてしか見られない」「世間では母親なら立派に子育てができて当然と考えている」の質問項目がある。

これらの質問項目を含む「身体的疲労」「社会・文化の重圧」の2因子は共に「母性愛信奉傾向」が高いほど「身体的疲労」の程度が増し、「社会・文化の重圧」を感じるということである。

「身体的疲労」の各質問項目から、「母性愛信奉傾向」が高いほど、家事、育児を母親として完璧にこなそうと頑張ってしまう、ストレスの程度が増してしまうのだろうということがうかがえる。

また、「社会・文化の重圧」の各質問項目からは、「母性愛信奉傾向」が高いほど、世間からの「母」に対する目（例えば、立派に子どもを育てられるのか等）を敏感に感じてよけいに頑張りストレスを増していく姿がうかがえる。そして「こんなにも頑張っているのに」という思いが益々募り、ストレスの程度が増していく状態になるのではないだろうか。

江上（2005）は「母性愛」をポジティブにもネガティブにも働く「両刃の剣」と指摘しているように、今回の結果においても、「母性愛信奉」が高ければ「母子関係における安定感」が増すというポジティブな面と、「身体的疲労」「社会・文化の重圧」においては「母性愛信奉」が高いほど「身体的疲労」の程度が増し、「社会・文化の重圧」を感じストレスを増加させるネガティブな面が考察された。

先に述べたように、「母性愛信奉傾向」そのものは「育児ストレス」を規定しないことが示されたが、そこに母親の「育児態度」が条件として加わった時には「育児ストレス」との関係はどのようなになるのであろうか。

Figure2-1 から Figure2-8 は、「母性愛信奉傾向」「育児態度」「育児ストレス」の分散分析のグラフである。

Figure2-1 の「育児態度」の因子である「神経質傾向」を条件に加えた時と、Figure2-2 の「育児態度」の因子である「外向的傾向」を条件に加えた時に交互作用が有意であった。

この結果から「神経質傾向」の高い人は、「母性愛信奉傾向」の程度に係わらず「育児ストレス」は高いが、「神経質傾向」の低い人は「母性愛信奉」が高くなれば「育児ストレス」が増すということが認められた。

また、「外向的傾向」の低い人は「母性愛信奉」の程度に係わらず「育児ストレス」が高く、「外向的傾向」の高い人は「母性愛信奉」が高くなれば「育児ストレス」が増すということも認められた。

以上のことから、「育児ストレス」は「母性愛信奉傾向」に母親の「育児態度」の中で特に「神経質傾向」「外向的傾向」の2因子が加わった時に規定されるということではないかと推測される。これは、村井(2002)が育児態度と育児負担感との関係において、母親が「外向的傾向」の育児態度であると負担感が少なく、「神経質傾向」や、「拒否的態度」では負担感が大きいとしていることとも一部一致する。しかし、今回の分析では、「神経質傾向」「外向的傾向」を低・中・高の3群に分け、さらに「母性愛信奉傾向」が及ぼす影響についても検討しており、より詳細な結果が得られたのではないだろうか。

今後、母親の「育児ストレス」の軽減を考えるときにおいても、「神経質傾向」のみに注目してその程度を下げようとするのではなく、「母性愛信奉傾向」の視点からも育児ストレスを軽減する方法を探ることができるのではないだろうか。また、「神経質傾向」が低くても、「母性愛信奉傾向」が高くなれば、「育児ストレス」は増すのであり、「神経質傾向」の低さにのみ注目して「育児ストレス」は低いだろうという判断を下してしまうことの誤りや、「外向的傾向」が高くても、「母性愛信奉傾向」が高ければ「育児ストレス」も有意に高くなるのであり、母親の「外向的な育児態度」がとられていることのみ注目して「育児ストレス」は低いだろうと判断してしまうことの誤りについても示唆することができたのではないだろうか。

また、この Figure2-1 から Figure2-8 においても、江上(2005)の言う「母性愛」はポジティブにもネガティブにも働くというものであるという視点から考察することができる。本研究では、Figure2-1 から Figure2-8 において、それぞれの「育児態度」因子を、低・中・高の3群に分けて検討しているため、より「母性愛信奉傾向」の精緻なメカニズムを考察することができた。

第3章 第3研究

第1節 目的

第3研究では「子育て中」群と「子育て終了」群の育児ストレスの違いや、「育児ストレス対処方法」尺度を作成し、その対処方法を比べることにより、子育て状況の時代ごとの変化をとらえる。

第2節 結果

Table3-1は「子育て中」群と「子育て終了」群で、「育児ストレス」の内容に違いがあるのかを検討するため、「子育て中」群と「子育て終了」群それぞれについて、「育児ストレス」尺度の各因子の得点を算出し、平均値の差の検定を行った。その結果、「母親としての無能力感」($t(392)=6.09, p<.001$)、「出産後の不安定な気分」($t(392)=5.09, p<.001$)、「社会・文化による重圧」($t(392)=3.57, p<.001$)、「身体的疲労」($t(392)=1.98, p<.05$)において「子育て終了」群よりも「子育て中」群のほうが有意に高い得点を示していた。「夫婦関係の不協和」($t(392)=-3.83, p<.001$)は「子育て中」群よりも「子育て終了」群のほうが有意に高い得点を示していた。「育児ストレス」総合得点では、「子育て終了」群よりも「子育て中」群において有意に高い得点傾向が認められた($t(392)=1.96, p<.10$)。

Table3-1 所属別にみた「育児ストレス」の因子の平均値

	子育て中群 (n=252)			子育て終了群 (n=142)		F値	t値	
	平均値	SD		平均値	SD			
母親としての無能力感	9.48	2.10	>	8.10	2.26	.68	6.09	***
夫婦関係の不協和	7.21	2.76	<	8.43	3.17	4.70	-3.83	***
幼稚園のお母さんとの対人関係	7.38	2.32		7.51	2.18	.40	-.53	n.s.
発達上の気がかり	6.26	2.50		5.93	2.13	3.81	1.35	n.s.
身体的疲労	8.24	2.77	>	7.68	2.47	2.74	1.98	*
出産後の不安定な気分	5.23	2.76	>	3.96	2.15	28.08	5.09	***
社会・文化による重圧	10.43	3.12	>	9.42	2.47	10.60	3.57	***
母子関係における愛着の不安定感	6.35	2.20		6.54	2.15	.04	-.85	n.s.
育児ストレス全体	57.99	11.41	>	55.64	11.41	.31	1.96	†

*** $p < .001$, * $p < .05$, † $p < .10$

育児ストレス対処方法 31 項目について因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った。

その結果、解釈可能性から 5 因子を抽出した。いずれの因子について負荷量が .30 未満の項目合計 6 項目を削除し、残った 25 項目について因子分析から項目削除まで一連の作業を繰り返したところ次項 Table3-3 に示すような結果を得た。

第Ⅰ因子は「育児に役立つ情報を集める」、「育児雑誌を読んで子どもの対応を考える」といった項目に負荷量が高く、情報を活用するということから「情報収集や支援の活用」と命名した。

第Ⅱ因子は「近所の人に手助けを頼む」、「近所の人に育児の大変さをきいてもらう」といった項目に負荷量が高く「同じ子育てをしている人たちと励ましあう」という項目もあり「他者との交流による対処」と命名した。

第Ⅲ因子は「思わず子どもに手を上げたり、怒鳴ったりしてしまう」「子どもに対して、つい感情的になる」といった項目に負荷量が高く「感情的対処」と命名した。

第Ⅳ因子は「一生懸命頑張って子育てするしか道はないと思う」、「子育てをするのは当然だと自分に言い聞かせる」といった項目に負荷量が高く、子育てを自分一人で頑張っている様子から「一人で我慢して頑張る対処」と命名した。

第Ⅴ因子は「夫に手助けを頼む」、「育児の大変さを夫に話す」から「夫の援助」と命名した。

アルファ係数は、第Ⅰ因子が .682、第Ⅱ因子が .653、第Ⅲ因子が .416、第Ⅳ因子が .626、第Ⅴ因子が .816 であった。

Table3-2 育児ストレス対処方法の因子分析結果（バリマックス回転後）

項 目	I	II	III	IV	V
育児に役立つ情報を集める	.700	-.076	-.074	.194	.153
育児雑誌を読んで子どもの対応を考える	.561	-.101	.001	.110	.112
子育て広場など公共の支援施設へ出かける	.464	.286	.031	.043	-.103
サークルに参加する	.442	.323	.088	.061	-.108
子育ての先輩や医師などの専門家に相談する	.429	.146	-.043	-.003	.092
「育児から学ぶことがある」と思うようにする	.374	.146	-.368	.352	-.057
近所の人に手助けを頼む	.021	.599	.097	-.093	.145
近所の人に育児の大変さをきいてもらう	.024	.593	.204	-.005	.242
同じ子育てをしている人たちと励ましあう	.296	.488	-.105	.160	.052
そのうち、何とかなるだろうと楽天的に考える	-.056	.463	-.119	.100	-.061
美容院へ行くなど自分にご褒美をあげる	.086	.406	-.023	.161	.123
近くの公園や、ショッピングモールなど、家の外へ出かける	.259	.312	-.107	-.069	.005
思わず子どもに手を上げたり、怒鳴ったりしてしまう	-.009	.033	.635	.031	-.078
子どもに対して、つい感情的になる	.029	-.089	.592	.098	.023
子どもを無視したり、子どもの声に耳を貸さない	-.024	.011	.554	.107	-.144
子どもの成長を楽しみにしてがんばる	.200	.245	-.423	.187	-.010
物に八つ当たりをする	-.004	.104	.389	.083	.046
一生懸命頑張って子育てするしか道はないと思う	.082	-.024	.068	.607	.069
子育てをするのは当然だと自分に言い聞かせる	.100	-.028	.194	.535	.037
自分で自分を励ましながら子育てをする	.167	.084	-.052	.504	.001
子育ては仕方のないことだと諦める	-.085	-.006	.264	.496	.059
子どもに手がかかるのは当たり前と思う	.119	.120	-.143	.327	.031
先のことは考えないようにする	-.229	.134	.100	.312	-.045
夫に手助けをたのむ	.147	.152	-.124	.068	.791
育児の大変さを夫に話す	.048	.170	-.007	.083	.785
寄与率	29.1	28.3	27.5	26.0	22.4

Table3-3 は「子育て中」群と「子育て終了」群で、「育児ストレス対処方法」に違いがあるのかを検討するため、「子育て中」群と「子育て終了」群それぞれについて、「育児ストレス対処方法」尺度の各因子の得点を算出し、平均値の差の検定を行った。

Table3-3 所属別にみた「育児ストレス対処方法」の因子の平均値

	子育て中群 (n=252)		>	子育て終了群 (n=142)		F 値	t 値	
	平均値	SD		平均値	SD			
情報収集や 支援の活用	13.91	3.15	>	12.85	3.34	.19	3.16	**
他者との交流 による対処	15.86	2.84	>	14.96	2.87	.60	3.03	**
感情的対処	11.14	2.29	>	9.88	2.41	.69	5.15	***
一人で我慢し て頑張る対処	15.86	2.99		16.39	3.32	2.01	-1.64	n.s.
夫の援助	6.06	1.50	>	5.04	1.55	.84	6.45	***

*** $p < .001$, ** $p < .01$

その結果、「情報収集や支援の活用」($t(392)=3.16, p<.01$)、「他者との交流による対処」($t(392)=3.03, p<.01$)、「感情的対処」($t(392)=5.15, p<.001$)、「夫の援助」($t(392)=6.45, p<.001$)において「子育て終了」群よりも「子育て中」群のほうが有意に高い得点を示していた。

次項 Table3-4 では、さらに詳しく「子育て中」群と「子育て終了」群とでは「育児ストレス対処方法」に違いがみられるのかを検討するため「育児ストレス対処方法」の各項目ごとの平均値の差の検定を行った。

Table3-4 所属別にみた「育児ストレス対処方法」の項目ごとの平均値

	子育て中群 (n = 252)			子育て終了群 (n=142)		F 値	t 値
	平均値	SD		平均値	SD		
1. 育児の大変さを夫に話す	3.13	.84	>	2.63	.85	2.87	5.67***
2. 子育てをするのは当然だと 自分に言い聞かせる	2.38	.93		2.53	1.10	12.03	-1.40n. s.
3. 先のことは考えないように する	2.56	.83		2.56	.90	1.96	-.07n. s.
4. 子どもに対して、つい感情的 になる	2.98	.59	>	2.6	.74	37.25	5.36***
5. 近所の人に育児の大変さを きいてもらう	2.2	.92		2.08	.82	13.87	1.38n. s.
6. 育児雑誌を読んで子どもの 対応を考える	2.15	.84		2.08	.89	.23	.81n. s.
7. 「育児から学ぶことがある」 と思うようにする	2.94	.74	>	2.76	.84	6.24	2.18*
8. そのうち、何とかなるだろ うと楽天的に考える	3.11	.70		2.97	.83	1.47	1.82n. s.
9. 思わず子どもに手を上げた り、怒鳴ったりしてしまう	2.76	.71	>	2.39	.75	7.75	4.87***
10. 夫に手助けをたのむ	2.94	.81	>	2.41	.90	14.54	5.80***
11. 育児に役立つ情報を集め る	2.52	.78		2.37	.91	6.71	1.59n. s.
12. 一生懸命頑張って子育て するしか道はないと思う	2.55	.85	<	2.85	.97	2.438	-3.18**
13. 子どもに手がかかるのは 当たり前と思う	3.48	.61		3.43	.73	6.72	.68n. s.
14. 物に八つ当たりをする	2.04	.86		1.91	.78	2.06	1.46n. s.
15. 近所の人に手助けを頼む	1.72	.81	<	1.96	.83	1.52	-2.81**
16. 子育ては仕方のないこと だと諦める	2.42	.94		2.43	.98	.64	-.09n. s.
17. 子育ての先輩や医師など の専門家に相談する	2.27	.845		2.13	.89	.13	1.57n. s.

18. 近くの公園や、ショッピングモールなど、家の外へ出かける	3.05	.62	>	2.76	.83	23.84	3.58***
19. 自分で自分を励ましながら子育てをする	2.48	.84		2.59	.92	1.39	-1.20 <i>n. s.</i>
20. 子どもを無視したり、子どもの声に耳を貸さない	1.71	.71	>	1.41	.65	3.51	4.12***
21. 美容院へ行くなど自分にご褒美をあげる	2.64	.81	>	2.15	.93	8.38	5.25***
22. サークルに参加する	1.82	.90		1.74	.89	.36	.84 <i>n. s.</i>
23. 子育て広場など公共の支援施設へ出かける	2.21	.94	>	1.77	.86	1.61	4.66***
24. 子どもの成長を楽しみにしてがんばる	1.65	.70		1.58	.73	.33	.95 <i>n. s.</i>
25. 同じ子育てをしている人たちと励ましあう	3.14	.79		3.04	.73	5.74	1.31 <i>n. s.</i>

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

その結果、「育児の大変さを夫に話す」($t(392)=5.67, p<.001$)「子どもに対して、つい感情的になる」($t(392)=5.36, p<.001$)「育児から学ぶことはあると思うようにする」($t(392)=2.18, p<.05$)「思わず子どもに手を上げたり、怒鳴ったりしてしまう」($t(392)=4.87, p<.001$)「夫に手助けをたのむ」($t(392)=5.80, p<.01$)「近くの公園や、ショッピングモールなど、家の外へ出かける」($t(392)=3.58, p<.001$)「子どもを無視したり、子どもの声に耳を貸さない」($t(392)=4.12, p<.001$)「美容院へ行くなど自分にご褒美をあげる」($t(392)=5.25, p<.001$)「子育て広場など公共の支援施設へ出かける」($t(392)=4.66, p<.001$)において「子育て終了」群より「子育て中」群のほうが有意に高い得点を示していた。「一生懸命頑張って子育てするしか道はないと思う」($t(392)=-3.18, p<.01$)「近所の人に手助けを頼む」($t(392)=-2.81, p<.01$)においては「子育て中」群より「子育て終了」群のほうが有意に高い得点を示していた。

第3節 考察

Table3-1 の「育児ストレス」の因子の平均値をみると、「子育て中」群と「子育て終了」群では「母親としての無能力感」「身体的疲労」「出産後の不安定な気分」「社会・文化による重圧」の因子において「子育て中」群が「子育て終了」群よりも有意に高い得点であった。

「母親としての無能力感」「身体的疲労」「出産後の不安定な気分」は、子育てで真最中だからこそより強固に感じられる因子なのではないかと推測できる。それは、「母親としての無能力感」では、子どものしつけや、育児方法についての項目であり、目前の子どもの様子を思い浮かべ、今思い通りいかないことなどが強く心に浮かぶのではないだろうか。

同じく「身体的疲労」は育児に追われての睡眠不足、疲労の項目であり、これも子育てで真最中だからこそ切実に感じるストレスなのではないだろうか。

「出産後の不安定な気分」は、「子育て終了」群よりも出産経験が最近の出来事であり、その印象が鮮明だからではないかと考えられる。

「社会・文化による重圧」は世間では立派に子育てができて当然とみなされるとか、育児は評価されないという項目であり、「伝統的母性観」がストレスの一因としてあり、また、「子育て終了」群よりも有意に高いということは「子育て終了」世代ならまだ当然としてとらえていた出来事が「子育て中」の世代ではより強く重圧感として認識されているということであろう。

そして、「夫婦関係の不協和」の因子のみが「子育て中」群よりも「子育て終了」群のほうが有意に高い得点であった。「夫婦関係の不協和」因子の質問項目は「夫は自分が期待するように協力してくれない」「自分ひとりで子どもを育てている」「夫は精神的に私を支えてくれる（逆転項目）」であり、このことから「子育て終了」世代では、夫による精神面、肉体面でのサポートが不十分と感じており、その思いが強く現在にいたっても残っているということが読み取れる。

「子育て終了」世代の子育て中の時代背景をみると、文献検討でも見てきたような「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という世論があり、また、1986年に「雇用の分野における男女の均等な機会及び待遇の確保等に関する法律」として「男女雇用機会均等法」が制定されたが、「子育て終了」世代の子育て中はこの法律の前後であり、女性の働く権利にも目が向けられつつあったものの、まだ就労現場には女性差別の部分が多く残存していた。そのため、結婚と同時に、または遅くとも結婚して妊娠すると就労現場を離れ家庭に入ることが多くみられた。そのため、必然的に夫は外で働き、妻は家庭でという形態になった。しかし、家庭に入り子育てに専念しながらも、その生き方に対してストレスを感じていた母親たちも多くいたのではないだろうか。

では、そのストレスに対処する方法としてはどのような方法が取られているのであろうか。

Table3-3 の「子育て中」群「子育て終了」群の「育児ストレス対処方法」の

因子の平均点をみると、5因子のうち4因子で「子育て中」群が「子育て終了」群よりも有意に得点が高かった。このことから「子育て中」群は「子育て終了」群よりも多くの方法でそのストレスを対処していることが分かる。

また、「子育て中」群と「子育て終了」群で唯一有意な差が出ていない因子が「一人で我慢して頑張る対処」である。このことから、「一人で我慢して頑張る対処」は世代を超えてとられてきた対処方法であるということが分かる。特に「子育て終了」群では「一人で我慢して頑張る対処」の平均値が最も高いということも、「子育て終了」世代の特徴としてあげられるのではないだろうか。

Table3-4 ではさらに詳しく「育児ストレス対処方法」を、質問項目ごとに検討している。「子育て中」群が「子育て終了」群よりも有意に高い質問項目が「育児の大変さを夫に話す」「夫の手助けを頼む」という「夫の援助」の因子と、「子どもに対して、つい感情的になる」「思わず子どもに手を上げたり、怒鳴ったりしてしまう」「子どもを無視したり、子どもの声に耳を貸さない」という「感情的対処」の因子と、「近くの公園や、ショッピングモールなど、家の外へ出かける」「美容院へ行くなど自分にご褒美をあげる」という「他者との交流による対処」の因子と、「子育て広場など公共の支援施設へ出かける」という「情報収集や支援の活用」の因子であった。

それに対して「子育て終了」群が有意に高い質問項目が「一生懸命頑張って子育てするしか道はないと思う」という「一人で我慢して頑張る対処」の因子と、「近所の人に手助けを頼む」という「他者との交流による対処」の因子であった。

以上のことから、「子育て中」世代は身近な手助けを夫に頼り、「子育て終了」世代は、近所の人に手助けを頼むという様子が見受けられた。このことは、夫の子育て参加意識の向上がその理由として上げられるのかもしれないが、高橋・園田（2008）が報告している「育児における近所の人とのつながりの希薄さ」が今回の結果からもうかがえるのではないだろうか。「子育て終了」世代は、文献検討においても見てきたように、夫は企業戦士として外で働き、妻は一人で家庭を守るという生活から、夫よりも近所の人に手助けを頼むということの方が多かったのではないだろうか。そして、まだ近所の付き合いということも大事にされていた時代ではなかっただろうか。

一方、「子育て中」世代のストレス対処方法として「感情的対処」が有意に高かった。このことから、いくら夫の手助けが増えたからといっても、昼間は母と子のみの時間であり、母親のストレスが直接子どもに向かっているということがうかがえるのではないだろうか。近所との交流のあまりない「孤育て」がそこには見えるようである。

母と子は、家の中での母と子の行き詰る関係から少しでも離れるために、家の外へと出かけるのではないだろうか。

荒牧・田村（2003）、柏木（2010）、西出・江守（2011）は、妻が楽しく育児をするためには、夫や、周囲のサポートが得られることが必要だと指摘して

いる。

確かに、「子育て中」世代では、夫の手助けという面においては改善が見られてきている。しかし、周囲のサポートという点においては、公共の子育てサポートを受けるにしても他所へ出かけていかねばならないという重荷が付いてくる。今助けて欲しい時にはそれでは間に合わないのではないだろうか。

文献検討においても見てきたように、子育ては、母親が社会の中で孤立して単独でうまく行えるものではなく(長谷川ら,2000)、アロマザリングが基本である(箕浦,2010;高橋,2010)。これらのことを考えた時に、今必要とされる「子育て支援」とはどのような形のものなのであるだろうか。根ヶ山・柏木(2010)のこのような、子どもの育つ場を「複数の集団成員による重層的育児ネットワーク」と考えることが重要なのではないだろうか。そして、その重層的育児ネットワークの一員として、地域の年配者の参加協力を考えていくことも必要なことかもしれない。色々な世代の人々が、繋がって生活できる社会を構築することが今、子育て中の人々だけではなく、様々な世代の人々にとって必要なことなのではないかと考える。

また、大日向(2005)は、「子育て支援が女性を育児に閉じ込めてはならない」ということを述べている。家の中の母子カプセルから、地域の母子カプセルに移行しただけの支援では、真の支援とはならないと主張している。

母親というだけではなく、一個人として社会と繋がれるということが大切なのではないかと考える。

第Ⅲ部 全体的考察

第1章 全体的考察

第1節 本論文の結論

本研究では、3つの研究目標を設定し検討してきた。第1研究は、社会文化的通念として存在するとされている伝統的性役割である「母性」が今も残っているのかを、大学生世代、子育て中世代、子育て終了世代の3世代による比較研究により明らかにすることであった。

第2研究は、「母性愛信奉傾向」の強さによって、「育児態度」や「育児ストレス」に違いはみられるのか、また「育児ストレス」を規定する要因は何であるかを探ることであった。

第3研究は、「子育て中」群と「子育て終了」群の育児ストレスの違いや「育児ストレス対処方法」尺度を作成し、その対処方法を比べることにより、子育て状況の時代ごとの変化をとらえることであった。

第1研究において、「母性愛」を信じる傾向は、子育て経験者では有意な差はみられなかった。このことから「母性」に対する社会文化的通念は、子育て経験者世代では根付いているとみなすことができる。しかし、大学生世代とは有意さも見られることから、「母性愛」を信じる傾向も希薄化してきていることがうかがえる。

子育て経験者である「子育て中」群と「子育て終了」群においても、質問項目ごとに検討していくと、そこには世代による差が表れていた。

「子育て終了」世代が過ごしてきた時代背景、社会一般常識といわれる（思い込まされていた）考えによって「母親」だからというよりも「女性」としての存在の在り方に対する囚われが表れていたことが特徴的であった。これは、それほどにも強く世の中全体の思想として「女性」「母親」としての在り方が規定されていたということである。その「子育て終了」世代と比較すると「子育て中」世代では、有意にそれらの質問項目の得点が低く、「女性」ならば「母親」ならばこのようにせねばならないという囚われの部分も少なくなっている。

特に、「子どもを産む母親だからこそ、子育ては何をさしおいても母親が行うべきことである」「母親であれば育児に専念することが第一である」の項目で「子育て中」群が「子育て終了」群よりも有意に低い点数であった。このことから、子育てを母親だけの手から開放し、アロマザリングによる子育ての必要性が見えてくる。

第2研究では、「母性愛信奉」は「育児ストレス」を規定するものではないということが分かった。しかし、項目ごとに検討していくと「母性愛信奉傾向」と「育児ストレス」の関係において、「母性愛信奉傾向」がポジティブに働く場合と、ネガティブに働く場合が見出された。

さらに、「母性愛信奉傾向」に「育児態度」の4因子を条件に加えた時の「育児

ストレス」の様子を検討した。この検討から、「子育て中」群においては、「母性愛信奉傾向」に、「育児態度」因子の「神経質傾向」と「外向的傾向」を加えた時に、交互作用が見られた。

以上のことから、子育て支援においては、第2研究から明らかにされた「母性愛信奉傾向」のもつポジティブに働く面と、ネガティブに働く面を考慮して、細やかな支援が必要であるということが示唆された。

第3研究では、「育児ストレス」と「育児ストレス対処方法」について検討した。「育児ストレス」および「育児ストレス対処方法」からは、「子育て中」群「子育て終了」群の時代背景の影響が示唆された。また、今求められている子育て支援についても、様々な公共支援ではカバーしきれていない部分があるということも明らかになってきた。

文献検討でも見たように、厚生労働省では、2010年に「子ども・子育てビジョン」を発表した。そこには、次代を担う子ども達が健やかにたくましく育ち、子どもの笑顔があふれる社会のために、子どもと子育てを全力で応援することを目的と定めている。また、「子どもが主人公(チルドレン・ファースト)」という考えの下、これまでの「少子化対策」から「子ども・子育て支援」へと視点を移し、社会全体で子育てを支えると共に、「生活と仕事と子育ての調和」を目指している。そして、政府をあげて、子どもを産み育てることに夢を持てる社会の実現のための施策を強力に推進することとし、5年間の数値目標が掲げられている。

子育て支援においては、公的な支援の部分と、私的な、個人が行える支援があると考えられる。その、個人が行える支援が、アロマザリングのネットワークによる子育て、つまり、母親以外の人たちが様々な場所・時間において共に子育てを担うということなのではないかと考える。

「孤育て」からアロマザリングによる子育てへと変化していくことが必要なのではないだろうか。そのような形こそが、私たち人類がヒトとして進化してきた中で獲得した適応だったのではないだろうか。

「複数の集団成員による重層的育児ネットワーク」の一員として、地域の年配者の参加協力を考えていくことも必要なことであろう。色々な世代の人々が、繋がって生活できる社会を構築することが今、子育て中の人々だけではなく、色々な世代の人々にとって必要なことなのではないかと考える。

第2節 今後の課題

今回の調査では、父親からのアンケートを採らず、母親との比較ができなかったことが残念であった。また、「子育て中」世代の独身の人たちへのアンケートによる比較など、まだまだ多くの調査による考察が必要であると感じている。

第Ⅳ部 引用文献

- 荒牧美佐子・田村 毅 (2003). 育児不安・育児肯定感と関連のあるソーシャル・サポートの規定要因 — 幼稚園児を持つ母親の場合 — 東京学芸大学紀要 6 部門, **55**, 88-93.
- 江上園子 (2005). 幼児を持つ母親の「母性愛」信奉傾向と養育状況における感情制御不全 発達心理学研究, **16**, 122-134.
- 江上園子 (2007, 2005). 「母性愛」信奉傾向尺度 堀 洋三 (監) 松井 豊・宮本聡介 (編) (2011). 心理測定尺度集 VI サイエンス社 pp214-218.
- 長谷川寿一・長谷川真理子 (2000). 東京大学出版会
- 長谷川麻衣 (2007). 母親の育児ストレスと母子相互交渉 — 横断研究による検討 — 発達研究, **21**, 151-162.
- 飯島さやか (2004). 幼児の母親用育児ストレス尺度 (MCSS) の作成 — 妥当性・信頼性の検討 — 聖心女子大学大学院文学研究科修士論文 (未公刊)
- 石月静江・薮田 貫 (編) (1999). 女性史を学ぶ人のために 世界思想社
- 柏木恵子 (1995). 親の発達心理学 岩波書店
- 柏木恵子 (2001). 発達心理学からみた母性・父性 根ヶ山光一 (編著) 母性と父性の人間科学 コロナ社 pp.135-159.
- 柏木恵子 (2010). アロマザリングを阻む文化 根ヶ山光一・柏木恵子 (編著) ヒトの子育ての進化と文化 甲斐閣 pp.163-181.
- 数井みゆき (2002). 母子関係研究の成果と問題点 日本家族心理学会 (編) 子育て臨床の理論と実際 金子書房 pp.51-62.
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2011). 第 14 回出生動向基本調査 結婚と出産に関する全国調査
- 厚生労働省 (2008). 平成 20 年版厚生労働白書
- 厚生労働省 (2008). 第 7 回 21 世紀出生児縦断調査結果

- 厚生労働省（2009）. 平成 21 年度社会福祉行政業務報告
- 厚生労働省政策統括官付政策評価官室（2010）. 平成 22 年 社会保障を支える世代に関する意識等調査報告書
- 厚生労働省（2012）. 平成 23 年人口動態統計（確定数）の概況
- 厚生労働省（2012）. 子ども虐待による死亡事例等の検証結果及び児童虐待相談対応件数等
- 箕浦康子（2010）. アロマザリングの文化比較 根ヶ山光一・柏木恵子(編著) ヒトの子育ての進化と文化 甲斐閣 pp.97-115.
- 村井則子（2002）. 母親の心理学 東北大学出版会
- 内閣府大臣官房政府広報室（2009）. 男女共同参画社会に関する世論調査
- 内閣府（2011）. 子ども・子育て白書
- 根ヶ山光一・柏木恵子（2010）. 人間の子育てを理解する窓としてのアロマザリング 根ヶ山光一・柏木恵子(編著) ヒトの子育ての進化と文化 甲斐閣 pp.1-8.
- 西出弘美・江守陽子（2011）. 育児期の母親における心の健康度（Well-being）に関する検討 -自己効力感とソーシャル・サポートが与える影響について- 小児保健研究, **70**, 20-26.
- 大日向雅美（1988）. 母性の研究 川島書店
- 大日向雅美・佐藤達哉(編)（1996）. 子育て不安・子育て支援, 現代のエスプリ, **342**,
- 大日向雅美（1999）. 子育てと出会うとき 日本放送出版協会
- 大日向雅美（2000）. 母性愛神話の罫 日本評論社
- 大日向雅美（2002）. 母性愛神話とのたたかい 草土文化
- 大日向雅美（2002）. 発達心理学の立場から こころの科学, **103**, pp.10-28.

- 大日向雅美 (2005). 子育ての変遷と今日の子育て困難・子育ての共有 大日向雅美・荘厳舜哉(編) 子育ての環境学 大修館書籍 pp.92-131.
- 高橋恵子 (2010). 愛着からソーシャル・ネットワークへ 根ヶ山光一・柏木恵子(編著) ヒトの子育ての進化と文化 甲斐閣 pp.119-137.
- 高橋道子・園田陽子 (2008). 育児への肯定的感情にソーシャル・サポートが与える影響 -東京・沖縄における調査- 東京学芸大学紀要 総合教育科学系, 59, 171-181.
- 田中千穂子 (1998). 子育て不安の心理相談 大月書店
- 若松素子・小口菜採・柏木恵子 (1991). 妻の就業をめぐる夫と妻の社会的性役割 東京女子大学紀要「論集」, 42, 157-183.
- 脇田春子 (2001). 日本史における母性・父性観念の変遷 根ヶ山光一(編著) 母性と父性の人間科学 コロナ社 pp.47-64.
- 山村 賢明 (1971). 日本人と母 東洋館出版社

謝辞

本論文を作成するに当たり、主査並び副査として御助言と御指導を賜りました、亀島信也教授・谷向みつえ准教授に深く感謝申し上げます。

亀島信也教授には、進化心理学という新たな視点を御教示いただき、論文を作成するにあたって理論の基本とすることができました。また、谷向みつえ准教授には、2年間に亘り論文作成の初歩から懇切に御指導をいただきました。重ねて御礼申し上げます。

さらに、本研究に御協力いただきました、幼稚園、保育園の保護者の皆様、大学生の皆様、そして調査に当たってお世話をいただきました教職員の皆様に感謝の意を表したいと思います。また、貴重な時間を割き調査に協力して下さった多くの友人にも感謝の意を表したいと思います。

ありがとうございました。

「母イメージ」についての調査

この調査は、育児や母親像についてどのように感じているのかを調べようとするものです。望ましい答えというものはありません。それぞれについて記入の注意をよく読んでお答え下さい。結果は統計的に処理し、あなた一人の回答のみを問題にしたり、公表することはありませんので、ご協力よろしくお願ひします。

*あなたの性別を○で囲んでください。

男性 女性

*あなたの年齢をご記入ください。 () 歳

*あなたの所属する学部・学科 学年を記入してください。

() 学部 () 学科 () 年生

*あなたの家族の皆さんの年齢と続柄をご記入ください。

(例) 父 50歳 母 45歳 妹 15歳

[]

*あなたのお母さんは、あなたが幼稚園・小学生の頃は毎日仕事に出かけていましたか。

は い いいえ

(調査者)

関西福祉科学大学大学院 社会福祉学研究科 心理臨床学専攻

高内 百合子 (指導者 谷向 みつえ)

〒 582-0026 大阪府柏原市旭ヶ丘 3-11-1

TEL 072-978-0088

(質問紙D) 次の各文章について、どうお考えになりますか。
各項目の右側にある5段階のうち、あなたの考えに合う番号を1つだけ選んで○をつけて下さい。

	ぜんぜんそう 思わない	あまりそう 思わない	どちらとも いえない	まあそう 思う	まったくその とおりだと思 う
1 母親になることが、女性にとって存在 <small>そんざい</small> の証 <small>あかし</small> と見なされる	1	2	3	4	5
2 子どものためなら、どんなことでもするつもりでいるのが母親である。	1	2	3	4	5
3 子どもを産む母親だからこそ、子育ては何をさしおいても母親が行うべきことである。	1	2	3	4	5
4 わが子のためなら、自分を犠牲 <small>ぎせい</small> にすることができるのが母親である。	1	2	3	4	5
5 母親であれば、育児 <small>せんねん</small> に専念することが第一である。	1	2	3	4	5
6 育児は女性に向いている仕事であるから、するのが自然である。	1	2	3	4	5
7 子どものためなら、たいいていのことは我慢 <small>がまん</small> できるのが母親である。	1	2	3	4	5
8 母親の愛情 <small>あいじょう</small> ほどに偉大 <small>いだい</small> で、気高く無条件 <small>むじょうけん</small> なものはない	1	2	3	4	5
9 子どもを産んで育てるのは、社会 <small>たい</small> に対する女性のつとめである。	1	2	3	4	5
10 なんととっても子どもには産み <small>う</small> の母親がいちばん良いのである。	1	2	3	4	5
11 育児 <small>せんねん</small> に専念したいというのが、女性の本音 <small>ほんね</small> である。	1	2	3	4	5
12 子どもが小さいうちは、母親は家庭にいて子どものそばにいてやるべきである。	1	2	3	4	5
13 母親の愛情 <small>あいじょう</small> はもちろん、子どもを自分よりも大切に <small>おも</small> 想 <small>おも</small> う気持 <small>きもち</small> や行動 <small>ぎんどう</small> こそが、子どもには絶対 <small>ぜったい</small> に必要なもの <small>ひつよう</small> である。	1	2	3	4	5

以上で質問は終わりです。書き忘れていた所がないか、もう一度見直してください。
ありがとうございました。

(質問紙A) 育児についての質問が40問あります。よく読んで「はい」「どちらともいえない」「いいえ」の中から1つだけを選んで○をつけて下さい。

	はい	どちらとも いえない	いいえ
1 子どもの世話をしている最中、何か他のことを考えふけることがよくありますか。	1	2	3
2 子どもを誰かにあずけると、ほっとすることがありますか。	1	2	3
3 おとなしい子どもよりも元気で活発な子どもを育てる方が自分には向いていると思いますか。	1	2	3
4 キレイ好きで、子どもの食器やオムツなどのよごれがとても気になるほうですか。	1	2	3
5 育児のやり方などに決心がつきにくくて、こうすればよかったのにと、くよくよしますか。	1	2	3
6 育児の負担は母親だけ重くかかりすぎていると思いますか。	1	2	3
7 子どもを連れてよその家に行くのが好きですか。	1	2	3
8 子どもの衣類の洗濯など、その日のうちにやらなければならないことを翌日までのぼすことがありますか。	1	2	3
9 子育てをどうしたらよいか不安になることがよくありますか。	1	2	3
10 子どもが思うようにいかない時など怒りっぽいほうですか。	1	2	3
11 自分がよいと思った育児上の知識を他の親にもすすめるほうですか。	1	2	3
12 子どもの様子が、いつもと違うと非常に気になるほうですか。	1	2	3
13 子どものことで、とりこし苦勞をしがちですか。	1	2	3
14 時には毎日の子どもの世話にうんざりすることがありますか。	1	2	3
15 だれとでも気軽に、子どものことを話すほうですか。	1	2	3
16 子どもをだれかにあずけたりした時、どうなっているか気にかかるほうですか。	1	2	3
17 自分の育児のやり方に自信がもてなくて、くよくよしますか。	1	2	3
18 時には、子どもをわずらわしく感じるがありますか。	1	2	3
19 乗り物などで隣の人が自分の子どもに声をかけてきた時、あなたは気軽に対応するほうですか。	1	2	3
20 育児のことについて周りの人から干渉されたくないほうですか。	1	2	3

はい
どちらとも
いいえ

21	子どもの長所 <small>ちようしょ</small> より、短所 <small>たんしょ</small> の方が目 <small>しんぱい</small> について心配なほうですか。	1	2	3
22	自分は育児 <small>む</small> にあまり向いていない方だと感じることはありませんか。	1	2	3
23	育児 <small>む</small> をかなり楽しみながらやっているほうですか。	1	2	3
24	てきぱきと子どもの世話 <small>せわ</small> をしているほうですか。	1	2	3
25	他の子どもや育児書 <small>ひかく</small> などと比較して、自分の子どもの発育 <small>はついく</small> でいどが気になるほうですか。	1	2	3
26	育児 <small>せんねん</small> に専念しているよりも、積極的 <small>せっきよくてき</small> に何か仕事をしている方が楽しいですか。	1	2	3
27	同じ年頃 <small>としごろ</small> の子どもをもった親 <small>なかよ</small> どうしで、すぐ仲良くなるほうですか。	1	2	3
28	子どもはきびしくしつけるべきだと思いますか。	1	2	3
29	育児 <small>む</small> について、よく知らないことでも、知ったふり <small>しりふり</small> をすることがありますか。	1	2	3
30	子どもに腹 <small>はら</small> を立てたり、かんしゃくを起こしたりすることがありますか。	1	2	3
31	子どもの世話 <small>せわ</small> で少々失敗しても、気楽 <small>きらく</small> に人に話せるほうですか。	1	2	3
32	できるだけ子どもには規則正しい毎日 <small>きそくただ</small> をおくらせるようにしていますか。	1	2	3
33	気が動転 <small>どうてん</small> して、どの様 <small>よう</small> に子どもを取り扱 <small>あつか</small> ったらよいか分からなくなることが時々ありますか。	1	2	3
34	早く子どもから手が離 <small>はな</small> せるようになればよいと思いますか。	1	2	3
35	新しい育児 <small>む</small> のやり方などを気軽 <small>きがる</small> にとり入れ、すぐになれるほうですか。	1	2	3
36	たとえば、子どもの食事や寝る時間など、決まったスケジュールをきちんと守 <small>まも</small> らないと気がすまないほうですか。	1	2	3
37	子どもの将来 <small>しょうらい</small> が、とても心配になることがありますか。	1	2	3
38	子どもの泣き声 <small>なごえ</small> を時にはうるさいと感じることがありますか。	1	2	3
39	育児 <small>む</small> について分からない事があつた時 <small>まらくたれ</small> 、気楽 <small>きらく</small> に誰かにたずねるほうですか。	1	2	3
40	あまり気かけずに、子どもの世話を他人にまかせることができるほうですか。	1	2	3

(質問紙B) 育児ストレスについての質問が24問あります。よく読んで、「まったくそう思わない」～「非常にそう思う」の5つの中から1つだけを選んで○をつけて下さい。

	そ う ま っ た く 思 わ な い	そ う 思 わ な い あ ま り	ど ち ら で も な い	そ う 思 う だ い た い	非 常 に そ う 思 う
1 子どもをしつけたつもりなのに身についていない。	1	2	3	4	5
2 夫は自分が期待するように協力してくれない。	1	2	3	4	5
3 幼稚園(保育所)のお母さん ^{どうし} の会話に疲れる。	1	2	3	4	5
4 他の子どもと比べて私の子どもは ^{おと} 劣っている。	1	2	3	4	5
5 毎日くたくたに疲れる。	1	2	3	4	5
6 出産直後、理由もなくとても悲しく感じた経験がある。	1	2	3	4	5
7 ^{がんば} 頑張っているのに育児は評価されない。	1	2	3	4	5
8 子どもは私が一番好きである。	1	2	3	4	5
9 自分の育児が正しいか自信がない。	1	2	3	4	5
10 自分ひとりで子どもを育てている。	1	2	3	4	5
11 子どもを ^{かい} 介した幼稚園(保育所)のお母さん同士の付き合いで気がかりなことがある。	1	2	3	4	5
12 子どもの発達に気がかりなことがある。	1	2	3	4	5

	そ う ま っ た く 思 わ な い	そ う 思 わ な い <small>あまり</small>	ど ち ら で も な い	そ う 思 う だ い た い	非 常 に そ う 思 う
13 家事、育児に終わられて睡眠不足 <small>すいみんぶそく</small> の日々が続いている。	1	2	3	4	5
14 出産直後、理由もなくとても落ち込んだ経験がある。	1	2	3	4	5
15 育児をしていると世間から取り残される。	1	2	3	4	5
16 子どもは私に一番なついている。	1	2	3	4	5
17 必要以上に子どもを叱 <small>しか</small> ってしまう感情的な自分が嫌い <small>きら</small> である。	1	2	3	4	5
18 夫は精神的に私を支えてくれる。	1	2	3	4	5
19 幼稚園(保育所)のお母さんとは表面上の付き合いが多い。	1	2	3	4	5
20 私の子どもは私が期待していたほどのことができない。	1	2	3	4	5
21 育児をしていると自分の体力の限界 <small>げんかい</small> を感じる。	1	2	3	4	5
22 周囲の人たちに「子どもの母親」としてしか見られていない。	1	2	3	4	5
23 私は親にとってもかわいがられた。	1	2	3	4	5
24 世間 <small>せけん</small> では母親なら立派 <small>りっぱ</small> に子育てができて当然 <small>とうぜん</small> と考えている。	1	2	3	4	5

(質問紙C)

子育てに困ったり、ストレスがたまったときどうしますか

「そうしない」～「いつもそうする」の4つの中から1つを選んで○をつけて下さい。

	しない	あまりしない	ときどきそうする	いつもそうする
1 育児の大変さを夫に話す。	1	2	3	4
2 子育てをするのは当然だと自分に言い聞かせる。	1	2	3	4
3 先のことは考えないようにする。	1	2	3	4
4 子どもに対して、つい感情的になる。	1	2	3	4
5 近所の人に育児の大変さを聞いてもらう。	1	2	3	4
6 一時保育などを利用し、一人きりの時間を作る。	1	2	3	4
7 育児雑誌を読んで子どもの対応を考える。	1	2	3	4
8 「育児から学ぶことがある」と思うようにする。	1	2	3	4
9 そのうち、何とかなるだろうと楽天的 ^{らくてんてき} に考える。	1	2	3	4
10 思わず子どもに手を上げたり、怒鳴 ^{どな} ったりしてしまう。	1	2	3	4
11 夫に手助けをたのむ。	1	2	3	4
12 育児に役立つ情報を集める。	1	2	3	4
13 一生懸命頑張って子育てをするしか道はないと思う。	1	2	3	4
14 子どもに手がかかるのは当たり前と思う。	1	2	3	4

	しない	あまりしない	ときどきそうする	いつもそうする
15 物に八つ当たりをする。	1	2	3	4
16 近所の人に手助けをたのむ。	1	2	3	4
17 子どもを、〇〇教室やおけいこごとに通わせる。	1	2	3	4
18 長電話や、インターネットをする。	1	2	3	4
19 子育ては仕方のないことだとあきらめる。	1	2	3	4
20 衝動買いや、むちゃ食いをする。	1	2	3	4
21 子育ての先輩や医師などの専門家に相談する。	1	2	3	4
22 近くの公園や、ショッピングモールなど、家の外へでかける。	1	2	3	4
23 自分で自分を励ましながら子育てをする。	1	2	3	4
24 子どもを無視したり、子どもの声に耳をかさない。	1	2	3	4
25 美容院へ行くなど自分にご褒美をあげる。	1	2	3	4
26 サークルに参加する。	1	2	3	4
27 祖父母に子どもを預かってもらう。	1	2	3	4
28 子育て広場など公共の支援施設へでかける。	1	2	3	4
29 子どもの成長を楽しみにして頑張る。	1	2	3	4
30 同じ子育てをしている人たちと励ましあう。	1	2	3	4
31 育児日記をブログ等で公開する。	1	2	3	4

うらにも 質問があります。

(質問紙D) 次の各文章について、どうお考えになりますか。
各項目の右側にある5段階のうち、あなたの考えに合う番号を1つだけ選んで○をつけて下さい。

	ぜんぜんそう 思わない	あまりそう 思わない	どちらとも いえない	まあそう 思う	まったくその とおりだと思 う
1 母親になることが、女性にとって存在 <small>そんざい</small> の証 <small>あかし</small> と見なされる	1	2	3	4	5
2 子どものためなら、どんなことでもするつもりでいるのが母親である。	1	2	3	4	5
3 子どもを産む母親だからこそ、子育ては何をさしおいても母親が行うべきことである。	1	2	3	4	5
4 わが子のためなら、自分を犠牲 <small>ぎせい</small> にすることができるのが母親である。	1	2	3	4	5
5 母親であれば、育児 <small>せんねん</small> に専念することが第一である。	1	2	3	4	5
6 育児は女性に向いている仕事であるから、するのが自然である。	1	2	3	4	5
7 子どものためなら、たいいていのことは我慢 <small>がまん</small> できるのが母親である。	1	2	3	4	5
8 母親の愛情 <small>あいじょう</small> ほどに偉大 <small>いだい</small> で、気高く無条件 <small>むじょうけん</small> なものはない	1	2	3	4	5
9 子どもを産んで育てるのは、社会 <small>たい</small> に対する女性のつとめである。	1	2	3	4	5
10 なんととっても子どもには産み <small>う</small> の母親がいちばん良いのである。	1	2	3	4	5
11 育児 <small>せんねん</small> に専念したいというのが、女性の本音 <small>ほんね</small> である。	1	2	3	4	5
12 子どもが小さいうちは、母親は家庭にいて子どものそばにいてやるべきである。	1	2	3	4	5
13 母親の愛情 <small>あいじょう</small> はもちろん、子どもを自分よりも大切に <small>おも</small> う気持ち <small>きもち</small> や行動こそが、子どもには絶対 <small>ぜったい</small> に必要なもの <small>ひつよう</small> である。	1	2	3	4	5

以上で質問は終わりです。書き忘れていた所がないか、もう一度見直してください。
ありがとうございました。

(質問紙E) 育児についての質問が40問あります。子育てをされていたときを思い出しながら、「はい」「どちらともいえない」「いいえ」の中から1つだけを選んで○をつけて下さい。

	はい	どちらとも いえない	いいえ
1 子どもの世話をしている最中、何か他のことを考えふけることがよくありましたか。	1	2	3
2 子どもを誰かにあずけると、ほっとすることがありましたか。	1	2	3
3 おとなしい子どもよりも元気で活発な子どもを育てる方が自分には向いていると思いましたか。	1	2	3
4 キレイ好きで、子どもの食器やオムツなどのよごれがとても気になるほうでしたか。	1	2	3
5 育児のやり方などに決心がつきにくくて、こうすればよかったのにと、くよくよしましたか。	1	2	3
6 育児の負担は母親だけ重くかかりすぎていると思いましたか。	1	2	3
7 子どもを連れてよその家に行くのが好きでしたか。	1	2	3
8 子どもの衣類の洗濯など、その日のうちにやらなければならないことを翌日までのぼすことがありましたか。	1	2	3
9 子育てをどうしたらよいか不安になることがよくありましたか。	1	2	3
10 子どもが思うようにいかない時など怒りっぽいほうでしたか。	1	2	3
11 自分がよいと思った育児上の知識を他の親にもすすめるほうでしたか。	1	2	3
12 子どもの様子が、いつもと違うと非常に気になるほうでしたか。	1	2	3
13 子どものことで、とりこし苦勞をしがちでしたか。	1	2	3
14 時には毎日の子どもの世話にうんざりすることがありましたか。	1	2	3
15 だれとでも気軽に、子どものことを話すほうでしたか。	1	2	3
16 子どもをだれかにあずけたりした時、どうなっているか気にかかるほうでしたか。	1	2	3
17 自分の育児のやり方に自信がもてなくて、くよくよしましたか。	1	2	3
18 時には、子どもをわずらわしく感じることはありませんでしたか。	1	2	3
19 のものとなりで隣の人が自分の子どもに声をかけてきた時、あなたは気軽に対応するほうでしたか。	1	2	3
20 育児のことについて周りの人から干渉されたくないほうでしたか。	1	2	3

はい
どちらとも
いいえ

21	子どもの長所 <small>ちようしょ</small> より、短所 <small>たんしょ</small> の方が目 <small>しんぱい</small> について心配なほうでしたか。	1	2	3
22	自分は育児 <small>む</small> にあまり向いていない方だと感じることはありませんか。	1	2	3
23	育児 <small>む</small> をかなり楽しみながらやっているほうでしたか。	1	2	3
24	てきぱきと子どもの世話 <small>せわ</small> をしているほうでしたか。	1	2	3
25	他の子どもや育児書 <small>むか</small> などと比較して、自分の子どもの発育 <small>はついく</small> でいどが気になるほうでしたか。	1	2	3
26	育児 <small>せんねん</small> に専念しているよりも、積極的 <small>せつきよくてき</small> に何か仕事をしているほうが楽しいでしたか。	1	2	3
27	同じ年頃 <small>としごろ</small> の子どもをもった親 <small>なかま</small> どうしで、すぐ仲良くなるほうでしたか。	1	2	3
28	子どもはきびしくしつけるべきだと思いましたか。	1	2	3
29	育児 <small>む</small> について、よく知らないことでも、知ったふり <small>し</small> をすることがありましたか。	1	2	3
30	子どもに腹 <small>はら</small> を立てたり、かんしゃくを起こしたりすることがありましたか。	1	2	3
31	子どもの世話 <small>む</small> で少々失敗しても、気楽 <small>きらく</small> に人に話せるほうでしたか。	1	2	3
32	できるだけ子どもには規則正しい毎日 <small>きそくただ</small> をおくらせるようにしていましたか。	1	2	3
33	気が動転 <small>どうてん</small> して、どの様 <small>よう</small> に子どもを取り扱 <small>あつか</small> ったらよいか分からなくなることが時々ありましたか。	1	2	3
34	早く子どもから手が離 <small>はな</small> せるようになればよいなと思いましたか。	1	2	3
35	新しい育児 <small>む</small> のやり方などを気軽 <small>きがる</small> にとり入れ、すぐになれるほうでしたか。	1	2	3
36	たとえば、子どもの食事や寝る時間など、決まったスケジュールをきちんと守 <small>まも</small> らないと気がすまないほうでしたか。	1	2	3
37	子どもの将来 <small>しょうらい</small> が、とても心配になることがありましたか。	1	2	3
38	子どもの泣き声 <small>なごえ</small> を時にはうるさいと感じることがありましたか。	1	2	3
39	育児 <small>む</small> について分からない事があつた時、気楽 <small>きらく</small> に誰か <small>たれ</small> にたずねるほうでしたか。	1	2	3
40	あまり気かけずに、子どもの世話を他人にまかせることができるほうでしたか。	1	2	3

(質問紙G) 子育ての頃を思い出しながら書いてください。

子育てに困ったり、ストレスがたまったときどうしていましたか。「しなかった」～「いつもそうした」の4つの中から1つを選んで○をつけて下さい。

	し な か っ た	あ ま り し な か っ た	と き ど き そ う し た	い つ も そ う し た
1 育児の大変さを夫に話す。	1	2	3	4
2 子育てをすることは当然だと自分に言い聞かせる。	1	2	3	4
3 先のことは考えないようにする。	1	2	3	4
4 子どもに対して、つい感情的になる。	1	2	3	4
5 近所の人に育児の大変さを聞いてもらう。	1	2	3	4
6 一時保育などを利用し、一人きりの時間を作る。	1	2	3	4
7 育児雑誌を読んで子どもの対応を考える。	1	2	3	4
8 「育児から学ぶことがある」と思うようにする。	1	2	3	4
9 そのうち、何とかなるだろうと楽天的 ^{らくてんてき} に考える。	1	2	3	4
10 思わず子どもに手を上げたり、怒鳴 ^{どな} ったりしてしまう。	1	2	3	4
11 夫に手助けをたのむ。	1	2	3	4
12 育児に役立つ情報を集める。	1	2	3	4
13 一生懸命頑張って子育てをすれば道はないと思う。	1	2	3	4
14 子どもに手がかかるのは当たり前と思う。	1	2	3	4

	し な か っ た	あ ま り し な か っ た	と き ど き そ う し た	い つ も そ う し た
15 物に八つ当たりをする。	1	2	3	4
16 近所の人に手助けをたのむ。	1	2	3	4
17 子どもを、〇〇教室やおけいごとに通わせる。	1	2	3	4
18 長電話や、インターネットをする。	1	2	3	4
19 子育ては仕方のないことだとあきらめる。	1	2	3	4
20 <small>しょうどうが</small> 衝動買いや、むちゃ食いをする。	1	2	3	4
21 子育ての <small>せんぱい</small> 先輩や <small>いし</small> 医師などの専門家に相談する。	1	2	3	4
22 近くの公園や、ショッピングモールなど、家の外へでかける。	1	2	3	4
23 自分で自分を <small>はげ</small> 励ましながら子育てをする。	1	2	3	4
24 子どもを <small>むし</small> 無視したり、子どもの声に耳をかさない。	1	2	3	4
25 美容院へ行くなど自分にご <small>ほうび</small> 褒美をあげる。	1	2	3	4
26 サークルに参加する。	1	2	3	4
27 祖父母に子どもを預かってもらう。	1	2	3	4
28 子育て広場など公共の <small>しえんしせつ</small> 支援施設へでかける。	1	2	3	4
29 子どもの成長を楽しみにして頑張る。	1	2	3	4
30 同じ子育てをしている人たちと <small>はげ</small> 励ましあう。	1	2	3	4
31 育児日記をブログ等で公開する。	1	2	3	4

うらにも 質問があります。

(質問紙D) 次の各文章について、どうお考えになりますか。
各項目の右側にある5段階のうち、あなたの考えに合う番号を1つだけ選んで○をつけて下さい。

	ぜんぜん そう 思わない	あまり そう 思わない	どちら とも いえ ない	まあ そう 思う	まっ たく その と お り だ と 思 う
1 母親になることが、女性にとって存在 <small>そんざい</small> の証 <small>あかし</small> と見なされる	1	2	3	4	5
2 子どものためなら、どんなことでもするつもりでいるのが母親である。	1	2	3	4	5
3 子どもを産む母親だからこそ、子育ては何をさしおいても母親が行うべきことである。	1	2	3	4	5
4 わが子のためなら、自分を犠牲 <small>ぎせい</small> にすることができるのが母親である。	1	2	3	4	5
5 母親であれば、育児 <small>せんねん</small> に専念することが第一である。	1	2	3	4	5
6 育児は女性に向いている仕事であるから、するのが自然である。	1	2	3	4	5
7 子どものためなら、たいいていのことは我慢 <small>がまん</small> できるのが母親である。	1	2	3	4	5
8 母親の愛情 <small>あいじょう</small> ほどに偉大 <small>いだい</small> で、気高く無条件 <small>むじょうけん</small> なものはない	1	2	3	4	5
9 子どもを産んで育てるのは、社会 <small>たい</small> に対する女性のつとめである。	1	2	3	4	5
10 なんととっても子どもには産みの母親がいちばん良いのである。	1	2	3	4	5
11 育児 <small>せんねん</small> に専念したいというのが、女性の本音 <small>ほんね</small> である。	1	2	3	4	5
12 子どもが小さいうちは、母親は家庭にいて子どものそばにいてやるべきである。	1	2	3	4	5
13 母親の愛情 <small>あいじょう</small> はもちろん、子どもを自分よりも大切に <small>おも</small> う気持ち <small>きもち</small> や行動こそが、子どもには絶対 <small>ぜったい</small> に必要なもの <small>ひつよう</small> である。	1	2	3	4	5

以上で質問は終わりです。書き忘れていた所がないか、もう一度見直してください。
ありがとうございました。